②動物

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：準絶滅危惧

ヤマコウモリ　*Nyctalus aviator*　ヒナコウモリ科

種の特徴

前腕長57～66mm、頭胴長89～113mm、尾長51～67mmで、標準的な体重は35～60ｇです。光沢のある褐色系の体毛で、一晩中飛翔する昆虫類を食べます。大きな樹洞で、雌だけ数十頭が群れて、初夏に１～２仔を出産、育仔します。一晩に捕る昆虫は、体重の半分近くです。

生息環境

昼間の隠れ場所は、寺社の境内などにある大木の樹洞です。

国内や県内の分布

県内では北部・中部の寺社や屋敷林の大木の樹洞などです。

市内の状況と絶滅危惧要因

10年前に武水別神社境内のケヤキ樹洞で生息が確認されています。今回はそこでは確認されませんでしたが、近くの河川敷上空で飛翔を確認しました。寺社の境内などの大木の樹洞をすみかにしていると考えられます。
生息個体数は、集団が小さくなっていると推察されます。

特記事項

大きな樹洞内で、集団で出産、育仔を行なう習性があります。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：準絶滅危惧

ヤマネ　*Glirulus japonicus*　ヤマネ科

種の特徴

頭胴長６～８cm、尾長４～５cmで、標準体重は18～25gです。体色は薄茶色、背中に一本の黒い筋があります。小さい虫類、甘い液果、花の蜜、種子などを食べます。５～10月に樹洞や巣箱の中で繁殖、３～５仔を育てます。比較的高地に生息し、寒冷期には体温を０℃近くまで下げ、仮死状態で、半年近く冬眠します。

生息環境

比較的高地の湿度の高い森林地帯に生息します。

国内や県内の分布

本州、四国、九州に分布します。県内では、標高1000m前後の森林地帯に分布しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

鏡台山の尾根筋のカラマツと落葉広葉樹の混交林に分布しています（30個の巣箱で繁殖した巣を１例、日内休眠用の巣材を４例確認）。市内での生息域は狭く、個体数も少ないです。千曲市では生息域が市町村境近くの尾根筋に限られていて、きわめて狭いことから、絶滅が危惧されます。

特記事項

昼間の休眠場所に細く裂いた樹皮やコケを搬入する習性があります。関西系と関東系があり、冬期の生態に著しい違いがあります。

準絶滅危惧　長野県：留意種　環境省：指定なし

キクガシラコウモリ　*Rhinolophus ferrumequinum*　キクガシラコウモリ科

種の特徴

前腕長50～70mm、頭胴長60～80mm、尾長28～45mmで、標準的な体重は17～35ｇです。
体毛は褐色で、鼻葉と耳が大きく目立ちます。蛾、コガネムシ、ハチ、トビケラなどの昆虫類を食べます。洞穴や家屋内を隠れ家とし、６～７月に１～２匹の仔を産みます。冬期はしめった洞穴で体温を下げて冬眠しています。

生息環境

昼間は洞穴や家屋の天井裏などを隠れ家とし、夜間に採食活動にでかけます。

国内や県内の分布

国・県ともに分布が知られていますが、生息数の減少が指摘されています。

市内の状況と絶滅危惧要因

森の沢山の開拓地で数個体を確認しています。分布域が狭く、個体数も少ないため、絶滅が懸念されます。

特記事項

冬眠は、しめった洞穴の天井にぶら下がり、体を翼で包んで冬眠していますが、光などの刺激を与えると数分で飛び立ちます。

準絶滅危惧　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ムササビ　*Petaurista leucogenys*　リス科

種の特徴

頭胴長30～50cm、尾長30～40cmで標準体重が700～1,500ｇです。木から木へ飛んで移動するための飛膜が首から前肢、後肢、尾の間に発達しています。樹洞に細く裂いたスギなどの樹皮をかからげた巣を作り、春と秋に１～４仔を産みます。糞は茶褐色で、直径５mmくらいのおがくずを丸めたような球形状です

生息環境

巣となる大木の樹洞の存在が、生息環境要因として重要です。

国内や県内の分布

すみか（樹洞）となる大木のある低山帯の自然林や寺社の境内の森林。

市内の状況と絶滅危惧要因

佐良志奈神社の境内の樹木で確認されています。糞の数、確認された木の本数も少なく、生息数の減少が考えられ、絶滅が危惧されます。

特記事項

モモンガと混同されやすいですが、ムササビはネコくらいの大きさ、モモンガはリスくらいの大きさです。
最近になり特に減少が顕著な種です。

留意種　長野県：指定なし　環境省：指定なし

アズマモグラ　*Mogera wogura*　モグラ科

種の特徴

頭胴長121～159mm、尾長14～22mmで、標準体重は48～127ｇです。上の門歯の配列がＶ字型です。昆虫類やミミズ類を主に採食、植物の種子なども食べています。通常は春に１回繁殖し、一度に２～６仔を産みます。土を掘る前肢が大変発達しています。

生息環境

耕作地や、そこに続く草地の地中を主な生活場所にしています。

国内や県内の分布

どちらかと言えば、本州の中部以北に多く分布しています。

市内の状況と留意要因

千曲川の河川敷から耕地に続く草地などに生息しています。地上のモグラ塚が地下の生息を示していますので、盛り上がった部分のある場合は、下にモグラのトンネルがあり、生息数は相当に多いと考えられます。アズマモグラの分布は千曲川を境に川東地区は関東系、川西地区は日本海系が生息分布しており、分布の面で興味深い境界域です。

特記事項

今回の種の同定はＤＮＡ解析を根拠としています。

留意種　長野県：―※　環境省：―※

ツキノワグマ　*Ursus thibetanus*　クマ科

種の特徴

頭胴長が120～150cm、標準体重が70～120kgで、全身が黒色で、胸に白い三日月模様があります。
木の若芽、若草、アリやハチなどの昆虫類、ドングリなどの木の実、ヤマブドウ、サルナシなどの液果などを食べます。越冬場所は大木の樹洞や岩穴で、冬眠中に１～２頭の仔を出産します。木登りが得意で、熊棚を作ります。

生息環境

ドングリなどの木の実をつける落葉広葉樹林に生活の多くを依存し生息しています。

国内や県内の分布

県下全域に生息していますが、生息数は減少しています。

市内の状況と留意要因

坊城平と鏡台山で爪痕や糞、キティーパーク上や西山で熊棚を確認し、川東地区、川西地区ともに個体の目撃が報告されています。しかし、以前確認された熊棚が今回確認できず、市内を生息エリアにしている個体数は少ないと推察されます。市内にはツキノワグマが冬眠できるような奥深い森林がなく、生息エリアの外周に位置する生息域と考えられることから、食料等の減少により、個体数の減少が懸念されます。

特記事項

ツキノワグマは減少が指摘されている種ですが、一因として、熊の胆が万病に効くとの俗信にあると言われています。

※長野県・環境省ともに地域個体群（LP）として種の指定はありますが、千曲市は指定の地域に含まれていません。

留意種　長野県：指定なし　環境省：指定なし

テン　*Martes melampus*　イタチ科

種の特徴

頭胴長45cm、尾長19cmで標準体重が1.1～1.5kgです。体毛色が黄色の個体（キテン）から、褐色の個体（ススステン）まで変異が大きいです。ノウサギ、ネズミ、は虫類、昆虫類から植物の果実まで、多様なものを食べています。４～５月に２～４頭の仔を出産します。木登りが得意で、樹洞などもすみかにしています。

生息環境

樹上を多く利用するので、森林を生息場所にしています。

国内や県内の分布

本州、四国、九州、北海道に分布しています。
県内は、県下全域の山地に生息しています。

市内の状況と留意要因

市内は全域の山地に分布しています。林道なども利用しており、糞がよく見られました。餌であるノウサギの減少により、個体数は少ないことが推察されます。この個体について、全身黄色のキテンは少ないと言われており、珍しいと言った観点より記載しました。

特記事項

夏毛、冬毛の特徴は、特に顔面に現れ、ススステンは年中灰褐色で、夏冬の差が目立たないが、キテンでは顕著です。

留意種　長野県：留意種　環境省：指定なし

カモシカ　*Capricornis crispus*　ウシ科

種の特徴

頭胴長70～85cm、標準体重は30～45kg、雌雄とも生え変わらない円錐形の角があります。木の葉や枝・草・ササなどを季節に合わせて採食しています。５～６月に１仔を産みます。単独行動することが多く、ある程度の距離があると、人間にもふり返って好奇心を示します。採食行動で昼間も出没します。

生息環境

低山帯から亜高山帯にかけての落葉広葉樹林・針広混交林に生息し、なわばりは10～20haで相当に広いです。

国内や県内の分布

本州・四国・九州に分布する日本固有種です。

市内の状況と留意要因

川東地区で生活痕跡が確認されており、目撃・写真情報もありますが、個体数は少ないです。生息痕跡の多い山林は、志賀高原や菅平の奥深い自然に連なっています。生息・繁殖の拠点として定住しているような場所が市の地域内に無いため、目撃される個体数の減少が危惧されます。

特記事項

糞はニホンジカに似ていますが、カプセル状でため糞します。国、県の天然記念物に指定されています。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：絶滅危惧ⅠB類　環境省：絶滅危惧ⅠB類

クマタカ　*Spizaetus nipalensis*　タカ科

種の特徴

全長は雄72cm、雌80cmで、上面は黒褐色、尾羽に数本の黒帯があり、顔が黒く、後頭部に冠羽があります。留鳥で、断崖や斜面の大木などに営巣し、繁殖します。主にノウサギ、ヤマドリ、大型のヘビなど、森林内に住むあらゆる中小動物を餌としています。旺盛な狩りの本能を活かし、昔から鷹狩りに使われてきました。日本の山岳地帯に住むイヌワシと並ぶ大型猛禽類の一種です。

生息環境

標高500mから1,500mの急峻な谷のある山地の森林に生息します。

市内の状況と絶滅危惧要因

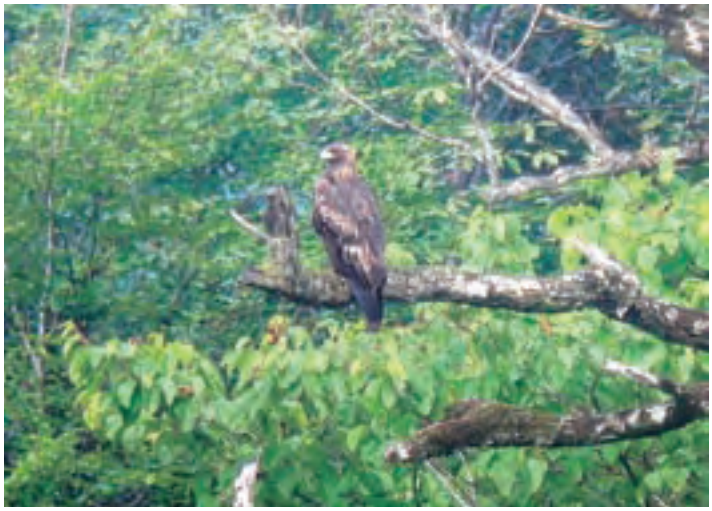
市内の川東・川西両地区の山地の落葉広葉樹林の深い渓谷に生息します。一個体生息を確認しています。生息域の開発や荒廃が絶滅危惧の要因です。

特記事項

国内希少野生動植物種。
クマタカは、強い鷹の意味です。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：絶滅危惧ⅠA類　環境省：絶滅危惧ⅠB類

イヌワシ　*Aquila chrysaetos*　タカ科



種の特徴

羽を広げると２mにもおよぶ大型の猛禽類で、体色は暗褐色から黒褐色、後頸が金茶色です。若鳥は風切羽の基部と尾の基部は白いですが、年齢や個体によって差があります。留鳥で、３～４月頃に岩棚に巣を作り、卵は普通２個生みますが、多くの場合、１羽だけしか生きのびられません。雛は70～90日で巣立ちます。主にノウサギやヤマドリなどの哺乳類や鳥類を食べます。

生息環境

標高1000m以上の山地に生息します。

国内や県内の分布

北海道から九州に分布し、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

川東地区の山地の上空で稀に確認されます。菅平方面に生息する個体が採餌のために飛来するものと思われます。
餌不足や森林伐採、生息地周辺の開発などにより、全国的に繁殖地が減少しています。

特記事項

国内希少野生動植物種に指定され、国指定の天然記念物です。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：準絶滅危惧

ヨシゴイ

Ixobrychus sinensis　サギ科

種の特徴

全長は37cm程度で、体色は茶褐色から黄褐色です。雄は頭頂が黒く、雌は赤褐色で、飛ぶと風切羽が黒く目立ちます。５月下旬頃市内へ渡来し繁殖する夏鳥です。繁殖場所は、水田、湿地、ヨシ原などの水辺の樹木、ヨシ原、竹林などです。水辺で、魚類、両生類、ザリガニなどを食べます。
警戒時、ミゾゴイ同様、体を真っ直ぐ空に向けて伸ばし、ヨシに似せる擬態をします。日本に住むサギ類の中では最も小型です。

生息環境

湖沼、河川、水田、ヨシ原などの湿地に生息します。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲川の河川敷内のヨシ原の湿地で見られます。個体数は少なく、河川の改修、公園等の造成による湿地の消失などが減少の要因と考えられます。

特記事項

ヨシゴイは“ヨシ原”に住む“ゴイサギ”の意味です。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

ササゴイ

Butorides striatus　サギ科

種の特徴

全長52cmほどで、成鳥は頭頂が黒く、体の上面は青緑色の光沢のある黒褐色、下面は淡い紫灰色です。足と目は黄色で、冠羽と背の飾り羽が目立ちます。
４月頃渡来する夏鳥で、水田、湖沼、河原、ヨシ原などに近い樹上で繁殖しています。
長いくちばしで、川や水辺で魚類、両生類を捕食しますが、1980年代になり、昆虫や木の実、鳥の羽などを疑似餌にして、寄ってくる魚を待ち伏せて捕らえる姿が観察されています。

生息環境

水田、湖沼、河原、ヨシ原などの低地や平地の水辺に生息します。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲川流域の河川敷の水域、水辺に生息していますが、近年は個体数が急激に減少しています。河川改修などで、河畔林が消滅しつつあることが原因と考えられます。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：準絶滅危惧

ハチクマ

Pernis apivorus

タカ科

種の特徴

全長は雄57cm、雌61cm程度で、上面は褐色から暗褐色、下面と下雨覆は白色、茶色、黒褐色と変化に富んでいます。
５月中旬頃渡来し、９月下旬頃南国へ飛んでいきます。山地の森林の樹上に皿型の巣を作り繁殖します。主にクロスズメバチの幼虫、時にヘビなどを餌にします。クロスズメバチや大型のスズメバチの巣を地中から掘るとき、ハチの成虫からの攻撃をどのように防いでいるのかなど、生態がまだよく分かっていません。

生息環境

標高1,500m以下の丘陵地から山地の森林に生息します。

市内の状況と絶滅危惧要因

川東・川西両地区の山地の農耕地や低山帯の山林に生息しています。東西の山林で、観察数は少なく、生息地の森林伐採や餌の特殊性から個体数の減少が懸念されています。

特記事項

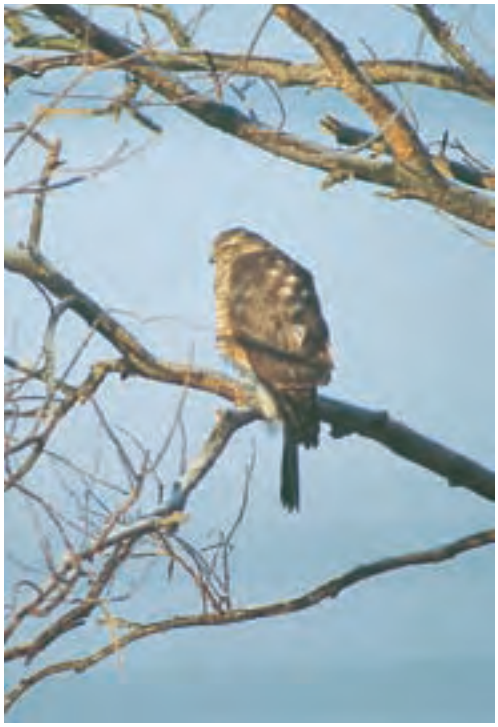
ハチの幼虫を好んで食べるところから、この名がつきました。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：準絶滅危惧

オオタカ

Accipiter gentilis

タカ科



種の特徴

全長は雄50cm、雌57cmで、上面は暗青灰色で白い横眉斑、下面は白く灰黒色の細かい眉斑があり、尾には４本の黒い帯が見られます。１年中見られる留鳥で、標高500m以下の平地から低山のアカマツなどの針葉樹に営巣して繁殖します。餌の約90％は、ムクドリ、スズメ、ドバトなどの鳥類です。オオタカは古来から、鷹狩りに用いられてきました。

生息環境

平地から、山林の林、丘陵地のアカマツ林、雑木林に生息し、獲物を求めて、農耕地や牧草地にも出現します。

市内の状況と絶滅危惧要因

市内では、低山帯、松林、雑木林などの二次林、千曲川上空でも見られます。
冬期、千曲川で越冬していると考えられます。集落や千曲川で確認数は増加傾向ですが、今後低山帯の開発により、生息域の減少、個体数の減少が懸念されます。

特記事項

国内希少野生動植物種。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：準絶滅危惧

ハイタカ

Accipiter nisus

タカ科

種の特徴

全長は雄32cm、雌39cmで、上面は黒みがかった青灰色、尾羽に黒帯がかかります。顔に白い眉斑があり、雄の下面は白地に赤褐色の横斑、雌の下面は白地に細かい横斑があります。
１年中見られる留鳥です。アカマツやカラマツなどの針葉樹に営巣し、繁殖します。
主に小鳥類やネズミやリスなどを餌にします。
森林の中や林縁部に住む森林性のタカです。

生息環境

丘陵地や低山帯の林に生息しています。林と水田、畑などが隣接する環境を好みます。

市内の状況と絶滅危惧要因

低山帯から亜高山帯に属するカラマツ林やマツ林に生息しています。オオタカより個体数が少なく、山地の開発や、森林伐採が原因と考えられます。

特記事項

一時、有機塩素系の農薬で個体数が激減しましたが、農薬の使用が制限されてから、回復しています。
鷹狩りに用いられた雌を“はしたか”と呼び、ここからハイタカという名がつきました。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：指定なし

アオバズク

Ninox scutulata

フクロウ科

種の特徴

全長は29cmほどで、上面は濃い褐色、下面は白く、濃い褐色の縦斑があり、虹彩と足指が黄色です。夏鳥で、社寺林などの巨木の樹洞に営巣し繁殖します。
主に大型の昆虫を餌にしています。人里近くの社寺林で、夜間「ホウホウ、ホウホウ」と二声ずつ続けて鳴きます。

生息環境

低山帯の大きな樹木のある森林や巨木のある社寺林や公園に生息しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

市内の社寺林（市街地、村落林、寺のケヤキなど）の古木に営巣し、最近は社寺林の多くに生息情報があります。

農薬の散布により、昆虫の減少、餌不足などが絶滅危惧の要因です。

特記事項

毎年、若葉が芽吹く頃、人里へ戻ってくるので、アオバズクの名前がつきました。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：絶滅危惧Ⅱ類

ヨタカ

Caprimulgus indicus

ヨタカ科

種の特徴

全長29cm程度で、全身が灰褐色の地に黒色や赤茶色の模様があります。背に縦斑、腹に横縞、嘴は横に広く裂けています。夏鳥で、５月頃アカマツ林などの地上へ、巣を作らず、直接産卵します。夜、飛んでいる昆虫などを食べ、キョッキョッキョッ……と長く続けて鳴きます。昼間、樹の横枝に平行にとまり、就眠しているが、周りに溶けこみ枝の一部のように見えます。抱卵中や育雛中、敵が近づくと擬傷行動をします。

生息環境

平地から、山地の草原、林縁、畑地などに生息します。

市内の状況と絶滅危惧要因

大田原地区、上山田地区、八幡大池などの山地の果樹園や農耕地などのある落葉樹林に生息します。生息域の開発、宅地化などで、近年個体数が減少しています。

特記事項

最近、里山の森からヨタカの声が聞かれなくなっています。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

ヤマセミ

Ceryle lugubris

カワセミ科

種の特徴

全長38cmほどで、全体的に黒と白のまだらの斑点があります。大きな嘴と冠羽、短い足が特徴です。１年中みられる留鳥です。３～８月頃、土質の崖に横穴を掘り、繁殖します。主に魚類を餌にしています。カワセミの仲間の中で、最大の鳥です。魚をねらう時、ホバリングしながら、川に飛び込み、一瞬にして捕らえます。捕らえた魚はとまっている枝などにたたきつけて殺してから食べます。

生息環境

山間の湖沼、ダム湖や河川の上中流域に生息しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲川流域の河川敷内の流木や杭にとまっています。近年、増加傾向ですが、増水等で崖が消失、低水位堤防のコンクリート化などで、減少が懸念されます。

特記事項

全国的には、近年河川や池沼の護岸工事などで、営巣場所が失われて減少しています。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：指定なし

サンコウチョウ　*Terpsiphone atrocaudata*　カササギヒタキ科

種の特徴

全長は雄45cm、雌18cm、頭に小さな冠羽、雄の頭、胸、脇は黒紫色、尾羽は30cmほどの長さになります。嘴と眼の周りはコバルト色で、雌は雄より色が淡く、尾羽が短いです。
４月下旬頃渡来する夏鳥で、５～７月薄暗い林の葉の無い小枝にクモの糸で巣材をからめたカップ状の巣を作り、繁殖します。
ハエ、ハチ、チョウなどの飛翔性昆虫を、樹枝にとまり、飛び回る虫をフライキャッチングします。

生息環境

平地から山地の薄暗い広葉樹林やスギ林で生息しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

倉科、戸倉地区の山麓のスギ林、山地の雑木林、スギ林の山地で生息します。倉科地区では、増加傾向にあります。戸倉地区では数個体を確認していますが、森林の伐採などにより減少も懸念されます。

特記事項

鳴き声が「月日星ホイホイホイ…」と聞きなされ、三光鳥という名前がつきました。雄も雌も囀ります。

準絶滅危惧　長野県：留意種　環境省：指定なし

チゴハヤブサ　*Falco subbuteo*　ハヤブサ科

種の特徴

全長30cmほどで、上面は青灰黒色、下面は白色、黒褐色の太い縦斑、顔に黒いひげ状の斑、下腹部と腿は赤茶色です。自分では巣を作らず、農耕地に隣接した林や公園、社寺林、鉄塔などにあるカラスなどの古巣を利用して営巣、繁殖する夏鳥（一部留鳥）です。９月末から10月中旬に南国へ南下します（タカ渡り）。空中で、小鳥、コウモリ類、昆虫類などを捕らえて餌にします。すぐれた飛翔力を活かして、空中の小鳥、昆虫（セミやトンボなど）を捕食しています。

生息環境

平地の疎林に生息し、周辺の耕地や草地など広い空間に生息します。

市内の状況と絶滅危惧要因

毎年１つがいが渡来し、社寺林（スギ、ケヤキの高木など）の限られた場所で営巣、繁殖していますが、個体数の増加がみられず、営巣場所が不安定（古巣の利用）なことから、減少が危惧されています。

特記事項

千曲市は本種が渡来する本州の南限に位置するものと思われます。

準絶滅危惧　長野県：情報不足　環境省：指定なし

クイナ　*Rallus aquaticus*　クイナ科

種の特徴

全長29cmほどで、上面はオリーブ褐色に黒い縦斑があり、腹と脇には白と黒の横斑があります。漂鳥（千曲市では冬期に見られる）で、秋、冬は本州中部以南へ移動します。湖沼、河川の湿地の草むらに皿形の巣を作り、繁殖します。
昆虫やクモ、カエル、小魚などを餌としています。子育てをしている際、ヒナを連れた親に敵が近づくと擬傷行動をし、ヒナから敵を引き離します。

生息環境

湖沼、河川、水田などの水辺の草地やヨシ原などの湿地に生息します。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲川流域や沢山川のヨシ原などの湿地に生息しています。個体数は少なく、河川改修や湿地の減少、天敵のイタチ等肉食哺乳類による個体数減少の危険性があります。

準絶滅危惧　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

コチドリ　*Charadrius dubius*　チドリ科

種の特徴

全長16cmほどで、体色は上面が褐色で頭と胸に太くて黒い帯があり、眼の周りに黄色のアイリングがあります。
夏鳥で、４～７月、砂礫地で小石や植物片を敷いた簡単な巣で繁殖します。
ヒナは孵化直後から歩き回り、餌を採ります。巣や雛に敵が近づくと、親は擬傷行動をして、巣から離します。
水辺や湿地などの昆虫やその幼虫を食べます。

生息環境

河川敷の中州や水辺、植生がまばらな荒れ地などに生息します。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲川流域や、秋の渡りのときは、屋代田んぼや千本柳の水田に生息しています。
河川敷内、中州、水辺の砂地や砂礫地で生息しますが、運動公園の整備や河川改修などで営巣地（砂礫地）が減少、また、四輪自動車やモーターバイクの河川敷への侵入など、人による繁殖の攪乱が大きく、個体数が減少しています。

準絶滅危惧　　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

イカルチドリ　*Charadrius placidus*　チドリ科

種の特徴

全長21cmほどの大きさで、コチドリに似ていますが、胸に細い黒帯があり、眼の縁は淡い黄色です。
１年中見られる留鳥です。３～８月、砂礫地で小石や小枝を敷いた簡単な巣で繁殖します。
ヒナは孵化直後から歩き回り、餌を採ります。巣や雛に敵が近づくと、親は擬傷行動をして、巣から離します。
餌は水生昆虫などの小動物です。

生息環境

河川の中流域の中州や河原などの砂礫地に生息しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲川流域の河川敷内、水辺、中州、河原等の砂礫地に生息しています。
コチドリより個体数は多いですが、河川改修などによる砂礫地の減少、また、四輪自動車やモーターバイクの河川敷への侵入など、人による繁殖の攪乱が大きく、個体数が減少しています。

準絶滅危惧　　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：指定なし

トラフズク　*Asio otus*　フクロウ科

種の特徴

全長38cmで長い耳羽（羽角）があり、平たい顔をしています。上面は黄褐色に黒褐色の縦斑があり、下面も上面と同じで、眼はオレンジ色です。
漂鳥（千曲市では冬見られる）で、冬に繁殖地から農耕地の村落へ移動します。
５～７月、大木の樹洞やカラスやワシタカの古巣を利用して営巣します。
主にネズミ類、モグラ類、鳥類も含めて餌にしています。
その骨や歯、毛などの不消化物をペリットとして吐き出します。

生息環境

平地から亜高山帯で繁殖し、冬季には農耕地の村落の屋敷林で生息しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

河川敷内や川柳などの疎林のある千曲川流域で生活します。千曲市では冬鳥として渡来しますが、個体数は僅少です。
越冬地としての河畔林の減少や餌不足が危惧要因としてあげられます。

準絶滅危惧　　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

フクロウ　*Strix uralensis*　フクロウ科

種の特徴

全長50cmほど、上面は灰褐色で、褐色縦斑が密にあり、下面は上面と同じ模様ですが色が濃いです。虹彩は濃い黒褐色をしています。
留鳥で、社寺林などの大木の樹洞などに営巣し繁殖します。
ネズミ類、小鳥類、昆虫類などを食べています。夜、「ゴロスケホッホ」と鳴く夜行性の猛禽類です。昼間、就寝しているところをカケス、コガラ、ヤマガラなどに発見されると、次々とつつかれてしまいます。

生息環境

低山から亜高山帯の森林、巨木のある広葉樹林、社寺林などに生息します。

市内の状況と絶滅危惧要因

市内各地の社寺林や山地に生息しています。ケヤキなどの樹洞のある巨木のある社寺林、山地にも営巣地は数カ所あります。生息域はおおむね２～３kmの範囲です。
巨木の減少や宅地化により餌場が減少しています。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

カワセミ　*Alcedo atthis*　カワセミ科

種の特徴

全長17cmほどで、尾が短く、足も短く小さな鳥です。上面は金属光沢のある濃い青色で、下面は赤栗色で、「飛ぶ宝石」とも呼ばれる美しい鳥です。
１年中みられる留鳥です。水際の土質の崖に横穴を掘って巣を作り、繁殖します。
主に魚類を食べ、巣穴の奥の産座に食べた魚のペリット（魚骨）を敷き詰めます。

生息環境

平野部の水のよどんだ川べりや湖、池、沼などに生息しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲川、沢山川等、各地の用水路にも生息しています。千曲川の河川敷の各地で観察されています。沢山川の下流では通年生息しています。
増加の傾向にありますが、堤防等のコンクリート化などで、営巣ができなくなることが減少の要因となっています。

特記事項

一時、幻の鳥となりかけましたが、1970年代ごろから次第に増え始めました。

準絶滅危惧　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：絶滅危惧Ⅱ類

サンショウクイ　*Pericrocotus divaricatus*　サンショウクイ科

種の特徴

全長20cmほど、頭、背、尾羽は褐色です。下面は白色で脇は淡い褐色、嘴は鉤型で、過眼線は黒色です。額の白色が目立ちます。
４月下旬頃渡来する夏鳥で、５～７月に林上部の枝上に椀型の巣を作り、繁殖します。
ハエ、ハチ、チョウなどの飛翔性昆虫をフライキャッチングして食べます。鳴きながら、小波状を描きながら飛びます。巣はクモの糸でからめ、外側にはウメノキゴケなどでカモフラージュします。

生息環境

山地や丘陵地、平地の大きな落葉樹林に生息します。

市内の状況と絶滅危惧要因

生萱地区、桑原地区の山地のマツ林、雑木林及び混交林で生息しています。もともと個体数が少なく、里山の荒廃によりいっそう絶滅が危惧されます。

特記事項

「サンショウは小粒でぴりりと辛い」という諺があり、この鳥がピリリリ…と囀ることからこの名がつきました。

準絶滅危惧　長野県：準絶滅危惧　環境省：準絶滅危惧

ノジコ　*Emberiza sulphurata*　ホオジロ科

種の特徴

全長14cmと小型です。雄は頭や背が灰緑色で、背には黒色の縦縞があり、眼の周囲は白色のリングがあります。下面は黄色です。４月下旬ごろ渡来する夏鳥で、５～７月にススキ等の根元やハイイヌツゲなどの低木の枝に椀型の巣を作り、繁殖します。青虫、甲虫などの昆虫類、草本の種子などを食べます。囀りは「チョンチョン、ピピチョピピチョ、ツツピーツツピー」と二節ずつ鳴くので、姿や鳴き声が似ているアオジとは異なります。

生息環境

低山や草原の湿原、周辺のハンノキ、ヤナギ、クルミなどの疎林に生息します。

市内の状況と絶滅危惧要因

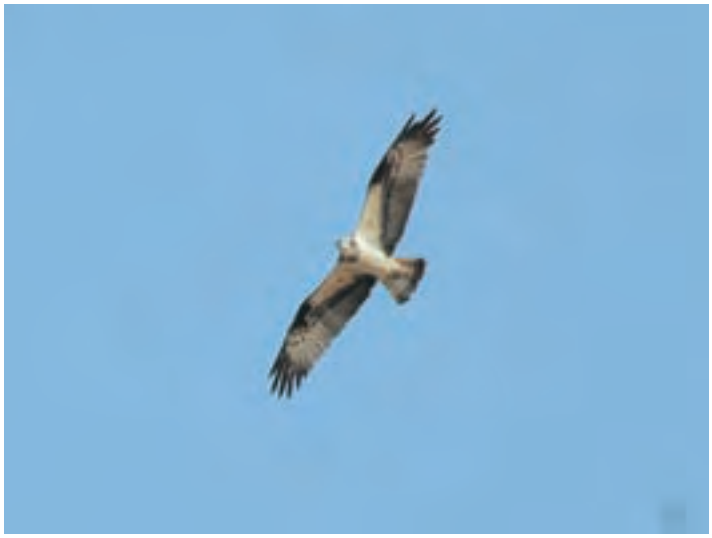
市西部の高原地帯のハンノキ、カラマツ、シラカバなどの疎林に生息しています。生息数は数個体で非常に少ないです。春秋の渡り時には千曲川を通過していきます。生息域の開発や樹林の伐採により減少の危険性があります。

特記事項

繁殖は本州中部以北で、世界的にもこの場所以外知られていません。ノジコの名前は、渡りの時に草原（野地）でよく見られていたので、つきました。

留意種　長野県：留意種　環境省：準絶滅危惧

ミサゴ　*Pandion haliaetus*　タカ科



種の特徴

全長は雄は54cm、雌は64cm程度。上面は暗褐色、下面と顔は白色で、首まで達する太くて黒い過眼線が目立ちます。
１年中見られる留鳥ですが、冬に暖地に移動する個体もいます。魚類を餌とし、空中でホバリングして、餌となる魚を見つけると、急降下して捕らえます。時に、体を完全に水没させて捕らえることもあります。
断崖の岩だなや樹木の樹冠部で繁殖します。

生息環境

海岸、河口、大きな湖沼などに生息します。

市内の状況と留意要因

千曲川などの水域に生息しています。秋から冬にかけて飛来しますが、近年では夏でも観察記録があります。毎年、市内ではおよそ１～２個体くらい観察されています。

特記事項

ミサゴの語源は「水さぐる」というところからきており、足を水の中に入れ、魚を捕らえる様を表しています。

留意種　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

ノスリ　*Buteo buteo*　タカ科

種の特徴

全長54cmほど。上面は暗褐色、下面はクリーム白色で、翼下面の翼角に暗褐色の斑があります。開いた尾は先端が丸みを帯びています。
留鳥ですが、一部は温暖な地方へ移動する個体もいます。アカマツやカラマツなどの針葉樹に営巣し、繁殖します。
ネズミ類などの小型哺乳類を餌とし、狩り場は農耕地、草地、伐採地などの開けた場所です。

生息環境

近くに農耕地のあるアカマツ林、カラマツ林に生息。雑木林内でも獲物を捕らえます。

市内の状況と留意要因

市内全域で飛翔している姿を見かけます。雑木林、混交林、針葉樹林、農耕地で餌を捕らえています。山麓から山地全域に生息し、千曲市でも千曲川で越冬しています。生息域の開発による営巣地の減少が懸念されます。

特記事項

亜種であるオガサワラノスリは国天然記念物。ダイトウノスリは国内希少野生動植物種。ノスリとは、野の上を滑翔（野擦り）するところから、この名がつきました。

留意種　長野県：留意種　環境省：絶滅危惧Ⅱ類

ハヤブサ　*Falco peregrinus*　ハヤブサ科

上：成鳥　下：幼鳥

種の特徴

全長は雄38cm、雌51cmで、上面は青灰色、下面は白色で、腹と脇に暗灰色の横斑、顔に黒いひげ状の黒斑があります。
旅鳥（漂鳥）で、秋の渡りの時期によく見られます。
海岸の崖や河岸段丘などの岩棚で繁殖します。
ハトやヒヨドリ大の鳥類を餌としています。狩りは、飛翔中の鳥の上空から翼をすぼめて急降下（時速300～400km）し、脚で蹴落とし、落下中の餌を空中でつかみます。

生息環境

河川流域、湖沼の畔、原野など、開けた場所に生息します。

市内の状況と留意要因

千曲川流域に生息し、送電線の高い鉄塔にとまり、休息したり、餌を探して狩り場としています。
個体数は少数で、生息域の環境悪化、餌不足による減少が危惧されます。

特記事項

国内希少野生動植物種。

留意種　長野県：留意種　環境省：指定なし

チョウゲンボウ　*Falco tinnunculus*　ハヤブサ科

種の特徴

全長は雄30cm、雌33cmで、上面は赤褐色ですが、雄の頭部は青灰色で、下面は淡褐色に黒い斑点があります。
１年中いる留鳥です。大きな崖の岩棚に営巣し、繁殖します。近年では、橋桁などの人工物にも営巣します。主に、ネズミ、モグラ類に昆虫、両生類も餌にします。ひらひらとホバリングしながら、短い滑翔を繰り返し、急降下して獲物を襲います。

生息環境

川沿いや海岸の崖を持つ草地、河口、川岸、農耕地などに生息します。

市内の状況と留意要因

市内東部地区から千曲川にかけて見られます。橋桁などの建造物や石切場に営巣することもあります。
千曲川の河川敷や山地の農耕地に生息し、近年は増加傾向にありますが、河川敷内のアレチウリ等の繁茂による餌場の減少が危惧の要因となっています。

特記事項

中野市十三崖の繁殖地は国指定天然記念物。

留意種　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ヒバリ　*Alauda arvensis*　ヒバリ科

種の特徴

全長17cmと小型です。頭に小さな冠羽、後脚に長い爪があります。漂鳥で、冬には温暖地へ移動します。
３月頃、草むらの地上に枯れ草などで椀型の巣を作り、繁殖します。乾燥した草原で草の実や昆虫を採食します。
空中の一点に静止して囀る空中囀りと地上囀りの二つのタイプがあります。

生息環境

草原、河原、農耕地、埋立地など荒れ地や草原に生息しています。

市内の状況と留意要因

千曲川や屋代地区に分布しています。河川敷や屋代田んぼの麦畑などで、少数確認されています。河川改修や中州などの礫地、麦畑の減少により、生息地が狭まり、個体数が激減しています。

特記事項

美しい声で長時間複雑に囀ることから、かつて飼い鳥として親しまれていました。

留意種　長野県：指定なし　環境省：指定なし

オオマシコ　*Carpodacus roseus*　アトリ科

種の特徴

全長18cmほどで、雄は体全体が桃紅色、額と喉は銀色、翼と尾に黒い模様が入ります。
11月頃渡来する冬鳥で、東シベリアやサハリン北部で繁殖します。ズミやイボタノキの実、キク科、タデ科、イネ科などの草の実を食べます。数羽から十数羽の群れで見られ、餌台にも訪れます。

生息環境

山地の明るい落葉広葉樹林やカラマツ林の林縁に生息しています。

市内の状況と留意要因

屋代地区、戸倉地区のヤマハギ、ヨモギなどがある林縁、草地に生息しています。年によって個体数に変動があります。越冬地の環境の悪化により減少が懸念されています。

留意種　長野県：指定なし　環境省：指定なし

イスカ

Loxia curvirostra

アトリ科

種の特徴

全長17cmで嘴は太く、先端が曲がり、上下がくい違います。雄は全体が赤褐色で、翼と尾羽は黒褐色で、雌は全体が黄褐色、翼や尾羽は黒褐色、下面に縦斑があります。11月中旬頃渡来する冬鳥です（一部繁殖）。アカマツなどの針葉樹に営巣します。

針葉樹の種子や夏はカラマツ、アカマツなどの新芽を食べます。くいちがっている嘴は、マツやスギなどの針葉樹の球果をこじ開けるのに都合良くできています。

生息環境

針葉樹林や針広混交林に生息しています。

市内の状況と留意要因

森地区の山林で、マツ林、カラマツ林、ハンノキのある林を好みます。

年によって個体数に変動があります。尾根づたいに多い水場の有無により、個体数が不安定です。

特記事項

イスカの名は“いすかし（ねじけている）”からきています。

準絶滅危惧　　長野県：情報不足　環境省：指定なし

タカチホヘビ　*Achalinus spinalis*　ナミヘビ科

種の特徴

全長20～60cmで、全体に光沢のあるビーズ状の鱗が並び、背中には黒くて細い線があります。鱗の構造から乾燥に弱いとされます。夜行性でミミズなどを捕食するため、人目につくことが少ないヘビです。

生息環境

里から低山地の森林内や林縁部で、落ち葉の下や朽ち木の下などに生息します。

国内や県内の分布

本州、四国、九州およびその周辺の島々、屋久島、種子島に分布し、県内では北部から南部に分布しますが、中南部での確認記録が多いです。

市内の状況と絶滅危惧要因

市内での確認例は極めて少なく、湯沢川で１個体が確認されているだけです。
道路の建設や森林伐採による生息環境の悪化や個体数の減少が懸念されます。

準絶滅危惧　　長野県：情報不足　環境省：指定なし

シロマダラ　*Dinodon orientalis*　ナミヘビ科

種の特徴

全長30～70cmで、薄い灰色の地に黒の斑紋がほぼ等間隔で並ぶきれいなヘビです。夜行性で物陰に隠れる性質があり、人目につくとこが少ないヘビです。主にトカゲを食べるといわれています。

生息環境

人里から山地の森林に生息し、初夏の雨天の夜には道路によく出没するといわれています。

国内や県内の分布

北海道から九州とその周辺の島々に分布する日本固有種で、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

市内での確認例は極めて少なく、森地区で死体の確認が１例あるのみです。
道路建設による移動経路の分断などにより、生息環境の悪化や個体数の減少が懸念されます。

情報不足　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ジムグリ

Elaphe conspicillata

ナミヘビ科

種の特徴

全長70～100cmで、幼蛇は赤みがかった茶褐色に黒い斑点があり、成長すると斑点は消えます。腹面には黒い市松模様があります。地中の穴によく潜ることが和名の由来です。主にネズミなどの小型哺乳類を食べます。

生息環境

低山帯の森林を好んで生息します。

国内や県内の分布

北海道から九州とその周辺の島々に分布し、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況

上山田の八坂で生体を確認し、倉科、三滝では死体を確認しましたが、道路で車に轢かれる個体が目立ちます。もともと生息密度は低いと考えられます。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

カジカガエル　*Buergeria buergeri*　アオガエル科

種の特徴

雄の体長は30～40mmで、雌は50～70mm。体は細身で扁平、体色は灰褐色で暗褐色の不規則な点があり、石や岩の上では保護色になります。鳴き声が美しいカエルで、指の先には大きな吸盤があります。

生息環境

河川の清流域とその周辺の森林に生息します。

国内や県内の分布

本州、四国、九州、五島列島に分布する日本固有種で、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

市内では三滝川にのみ生息していますが、個体数は少ないです。
河川工事による水質汚濁や生息環境の消失が懸念されます。

特記事項

鹿の声に似ているため「河鹿」の名前がつけられました。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：指定なし

ツチガエル　*Rana rugosa*　アカガエル科

種の特徴

全長は35～50mm。体色は灰褐色～黒褐色で、イボが目立ちます。水辺から離れることはなく、アリを好んで食べるほか、クモや小型の昆虫類を食べます。体から嫌な臭いを出すため、ヘビに食べられることは少ないようです。

生息環境

平地から低山地の水田、池沼などに生息します。

国内や県内の分布

本州から九州と周辺の島々に分布し、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

姨捨の棚田では比較的多くの個体が生息しており、市内の水田地帯でも生息していると思われます。
圃場整備による水田の乾田化や小川のU字溝化などにより、近年、各地で個体数が激減しているといわれています。

情報不足　長野県：指定なし　環境省：指定なし

タゴガエル　*Rana tagoi tagoi*　アカガエル科

種の特徴

全長は30～60mmで、体色は茶褐色で、のどの下側に黒色の細かい斑点があります。伏流水中に産卵する変わった習性をもつ特異なカエルですが、その存在はあまり知られていません。石の下からクックックッやグッグッグッという声で鳴きます。

生息環境

主に低山地の森林内の細流付近に生息しますが、標高2000m以上にも生息します。

国内や県内の分布

本州、四国、九州に分布する日本固有種で、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況

佐野の林道脇を流れる細流で鳴き声を確認しましたが、もともと生息密度は低いと考えられます。林道整備などによる生息環境の減少が懸念されます。

留意種　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ハコネサンショウウオ　*Onychodactylus japonicus*　サンショウウオ科

種の特徴

全長は10～20cmで尾が非常に長く体長の半分以上に達します。体色は暗褐色で背中に黄褐色の縦縞がありますが、地域によって変異があります。日本に生息するサンショウウオの中で、唯一肺を持たず、皮膚呼吸を行います。幼生は指の先に黒いツメがあります。

生息環境

低山地から高山までの山地に生息し、幼生は河川源流域の水中に生息します。

国内や県内の分布

本州と四国に分布し、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況と留意要因

三滝川源流、沢山川源流、佐野川源流、大池の弁天清水、久露滝などに生息していますが、個体数は比較的少ないです。森林伐採による生息環境の変化が懸念されます。

特記事項

新山地区の氷清水のハコネサンショウウオは市の天然記念物に指定されています。

留意種　長野県：指定なし　環境省：準絶滅危惧

イモリ

Cynops pyrrhogaster

イモリ科

種の特徴

全長は８～13cmで長い尾を持ちます。背中は黒褐色で腹側は赤色の地に黒の斑点があります。サンショウウオと違い、皮膚がザラザラしています。

生息環境

水田や池沼に生息します。

国内や県内の分布

本州、四国、九州とその周辺の島々に分布する日本固有種で、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況と留意要因

大田原の水田、羽尾の湯沢川上流の溜池で生息を確認しましたが、個体数は少なくないと思われます。圃場整備などによる生息環境の減少が懸念されています。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：絶滅危惧ⅠA類　環境省：絶滅危惧ⅠB類

ウケクチウグイ　*Tribolodon nakamurai*

コイ科

種の特徴

全長は最大で約80cm。体形はウグイに似ていますが、吻（眼より前方の部分）が長く、下あごが上あごよりも前方に突き出し、口が上を向きます。本種の生態や生活史についてはほとんど分かっていません。

生息環境

河川の中下流域に生息します。

国内や県内の分布

信濃川水系、阿賀野川水系、最上川水系などに分布する日本固有種で、県内では飯山市から千曲市（旧更埴市）に至る千曲川本流で捕獲記録があります。写真の個体は、2007年５月７日に千曲川の長野市村山橋のつけばで捕獲されたものです（全長60cm、体重1.5kg）。

市内の状況と絶滅危惧要因

1990年に旧更埴市で捕獲記録がありますが、これ以降、市内での確認はありません。
減少要因は不明ですが、自然界での個体数はきわめて少ないと言われています。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：絶滅危惧ⅠB類

ホトケドジョウ　*Lefua echigonia*

ドジョウ科

種の特徴

全長は最大で約８cm。背側は灰褐色で腹側は黄褐色。体の側面から背面にかけて小さな黒い斑点があります。ドジョウに比べると体が太くて短く、口ひげは４対（ドジョウは５対）です。産卵期は３～７月で、雌は水草に卵を産み付けます。

生息環境

水田周りの小さな溝や湿地、湧水を水源とする細流に生息します。

国内や県内の分布

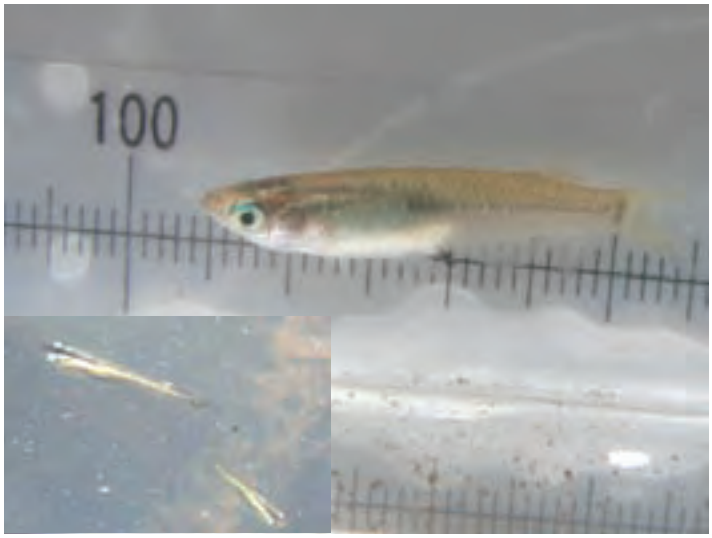
青森県を除く東北地方から近畿地方までに分布する本州固有の亜種で、県内では犀川水系と千曲川水系が主な生息域です。

市内の状況と絶滅危惧要因

沢山川のごく限られた範囲に生息します。現地調査では約80個体を確認しました。
水路のコンクリート化による生息環境の消失、農薬散布による個体の絶滅が懸念されます。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：絶滅危惧ⅠB類　環境省：絶滅危惧Ⅱ類

メダカ　*Oryzias latipes*　メダカ科



種の特徴

全長は最大で約４cm。目が大きく、口は上向きです。上から見ると背が暗褐色で目立ちます。背びれは体の後方にあり、雄の背びれには切れ込みがあります。動植物プランクトンやイトミミズなどを食べる雑食性です。産卵期は７～８月で、雌は卵をしばらく腹に付けて泳ぎ、その後、水草などに産み付けます。

生息環境

平地の池沼、水田、用水、河川の緩流部に生息します。

国内や県内の分布

北海道を除く全土に分布し、県内では佐久地方と木曽地方を除く北部、中部、南部に分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

沢山川水系の大堰に生息します。以前は市内の用水でも姿が見られたようですが、現地調査では大堰以外では確認できていません。農薬散布による生息個体の減少、ヒメダカや産地の異なるメダカの放流による遺伝的特性の消失が懸念されます。日本のメダカは遺伝的組成の違いにより、北日本集団と南日本集団に分けられ、県内のメダカは南日本集団に分類されます。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：絶滅危惧Ⅱ類

スナヤツメ　*Lethenteron reissneri*　ヤツメウナギ科

種の特徴

全長は約20cm。目の後ろに並ぶ７対のエラ穴を眼に見立てて、本物の眼と合わせて八目（ヤツメ）と呼ばれます。体色は淡い青色で、口は吸盤となっています。産卵期は４～５月で、主に湧水のある砂礫底に穴を掘って産卵します。孵化後は眼が未発達でアンモシーテスと呼ばれます。

生息環境

河川の中流域や細流、湧水を水源とする冷水を好みます。

国内や県内の分布

北海道から九州に分布し、県内では千曲川水系、犀川水系、姫川水系、天竜川水系の一部に分布しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

聞き取り調査では、以前に力石を流れる用水で確認されています。

特記事項

本種は南日本型と北日本型に分かれ、外見上は全く区別できませんが遺伝子が異なります。このような種のことを「隠蔽種」と呼びます。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：絶滅危惧Ⅱ類

アカザ　*Liobagrus reini*　アカザ科

種の特徴

全長は最大でも10cm。体色は赤褐色から明るい赤褐色まで変異が見られます。背びれと胸びれには鋭いトゲがあり、不用意につかむと刺されて激痛を感じます。産卵期は５～６月で、川の瀬の石の下に卵を産み付けて雄が保護します。

生息環境

比較的きれいな水の中流域から上流域下部の瀬の石の下や間に生息しています。

国内や県内の分布

宮城県、秋田県以南の本州、四国、九州に分布する日本固有種で、県内では全県下の河川の中上流域に分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

聞き取り調査では市内の千曲川で2010年の春にカゴワナにより１個体が捕獲されています。また、近年では坂城町の鼠橋周辺で、河川工事の際にテトラポットの下に多数の個体が確認されています。河川改修や砂礫の採取などにより生息場所や産卵場所の減少が懸念されますが、最近では本種が復活している河川もあります。

特記事項

県内ではサソリやサスリとも呼ばれています。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：情報不足

ニッコウイワナ　*Salvelinus leucomaenis pluvius*　サケ科

種の特徴

イワナの一亜種で、全長は20～60cm。背びれと尾びれの間に脂びれがあります。体色は暗褐色で、体の側面から背側に瞳大の白い斑点があり、側面には黄色や橙色の斑点が見られます。水生昆虫や落下した陸上昆虫類、時にはサンショウウオなどの小動物も食べる動物食です。産卵期は10～11月で、河川の上流域の砂利底に産卵します。

生息環境

河川の上流域や冷水域の湖沼に生息します。

国内や県内の分布

山梨県富士川および鳥取県日野川以北の本州各地に分布し、県内では日本海に流れ込む千曲川、犀川、姫川などに分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

現地調査では佐野川の上流部、三滝川上流部、沢山川上流部で生息を確認しました。なお、佐野川は地質の影響で水質は酸性ですが、上流部は酸性ではないため本種の生息が可能です。確認した個体数は少ないです。
河川改修や砂防ダムの建設、河畔林の伐採等による生息環境の変化、乱獲による個体数の減少が懸念されます。

特記事項

県内では天竜川水系や木曽川水系に別亜種のヤマトイワナが分布しています。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：準絶滅危惧

カジカ　*Cottus pollux*　カジカ科

種の特徴

全長は約15cm。体色は淡い褐色から暗褐色まで変異に富み、体形はハゼに似ています。カジカには海に下る小卵型・中卵型と河川陸封性の大卵型に分けられます。産卵期は１～３月で、瀬の石の下に卵を産み付けます。水生昆虫などを食べる動物食です。

生息環境

比較的きれいな水で水温の低い河川の中流域から上流域に生息します。

国内や県内の分布

北海道南部、本州、四国、九州西部に分布し、県内では全県下の河川中流域から上流域に分布します。県内のカジカは大卵型になります。

市内の状況と絶滅危惧要因

聞き取り調査では2008年の春に篠ノ井橋で投網により１個体が捕獲されています。河川改修や砂礫の採取などにより生息場所や産卵場所の減少が懸念されますが、最近では本種が復活している河川もあります。

特記事項

近年では養殖や人工孵化により各地で放流が行われており、地域的な遺伝的特性の消失が懸念されます。

情報不足　長野県：準絶滅危惧　環境省：準絶滅危惧

ヤマメ（サクラマス）　*Oncorhynchus masou masou*　サケ科

種の特徴

海に降りて成長し、河川に遡上する個体をサクラマスと呼び、一生を河川の中上流域で過ごす個体をヤマメと呼びます。サクラマスの全長は最大で約60cm、ヤマメは最大で約30cmです。ヤマメの背側には小さな黒点が散在し、側面には小判型の斑紋が並びます。産卵期は９～10月で、砂礫底を掘って産卵します。水生昆虫や落下した陸上昆虫を食べる動物食です。

生息環境

河川の中上流域や冷水域の湖沼に生息します。

国内や県内の分布

北海道と東北ならびに北陸地方では多くの個体が降海してサクラマスとなり、関東や北陸地方以西の日本海側の本州と九州には河川で過ごすヤマメが主に分布します。県内では日本海にそそぐ河川の中上流域や冷水域の湖沼に分布します。

市内の状況

聞き取り調査では、30～40年前に更埴漁協による放流が一度だけ行われており、また、千曲川でも上流域の支流から流下した個体が生息している可能性があります。

特記事項

ヤマメとよく似ていますが、側面に朱点が散在するのはアマゴと呼ばれ、県内では太平洋にそそぐ河川に分布しています。なお、放流によりヤマメとアマゴが混生している河川もあります。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：指定なし

マルタンヤンマ　*Anaciaeschna martini*　ヤンマ科

▲メス

種の特徴

体長は約73mm、翅長46mm。全身が赤褐色で、胸部と腹部に、雄は青色、雌は黄緑色の斑紋があり、雄の複眼はコバルトブルーです。翅は褐色で、雌では翅の基部が黒褐色になります。６月下旬～９月に成虫は発生します。幼虫はため池や公園の池などのガマなどの挺水植物が繁茂する水域に生息します。日中は薄暗い樹林の枝にとまっていることが多く、夕方に上空を一直線に飛翔、パトロールします。

生息環境

平地や丘陵地の挺水植物が繁茂する池沼などに生息します。

国内や県内の分布

岩手県と関東地方以西の本州、四国、九州に分布します。県内では記録が少ないです。

市内の状況と絶滅危惧要因

上山田の公園の池で確認しました。個体数は極めて少なく、記録も少ないことから増減は不明です。

特記事項

和名はフランスのトンボ学者Ｒマルタンにちなんだものです。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

オジロサナエ　*Stylogomphus suzukii*　サナエトンボ科

▲オス

種の特徴

体長約40mm、翅長23mmで本州では一番小さいサナエトンボで、胸側にＹ字型の黒条があり、腹端が白いです。成虫は７月下旬～９月に発生し、幼虫は河川のよどみや砂泥の中に生息しています。
８月～９月に低山地の渓流で産卵します。

生息環境

低山地の渓流に生息します。

国内や県内の分布

本州、四国、九州に分布し、日本特産種で産地は局地的です。県内にも数カ所で記録があるのみです。

市内の状況と絶滅危惧要因

今回の調査で雄１個体のみ湯沢川で確認しましたが、個体数は極めて少なく、河川改修で、生息地の破壊により絶滅のおそれがあります。

特記事項

腹端の付属器が白いことからこの名があります。

絶滅危惧Ⅰ類　　長野県：絶滅危惧Ⅰ類　環境省：指定なし

オオトラフトンボ　*Epitheca bimaculata sibirica*　エゾトンボ科

▲メス

種の特徴

体長 約55mm、翅長約40mmで複眼は緑灰褐色で、腹部は黒と黄の虎に似た斑紋があります。成虫は5～6月に発生します。幼虫は、池の植物性沈積物の陰、または柔らかい泥の中に生息します。成虫は浮葉植物などが繁茂する水域で5月下旬から6月頃に産卵します。卵は紐状になったゼラチンの中に1000個ほど入っています。
産卵直後はその紐は10cmくらいで、時間を経たものでは30cmくらいになります。

生息環境

寒冷地の池沼や、山岳地域の水生植物のある池などに生息しています。

国内や県内の分布

北海道、本州の長野、山梨、新潟、栃木、群馬、東北地域に分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

市内では、八幡大池などの山地のため池に生息し、個体数は非常に少ないです。
ため池の改修（岸のコンクリート化）や外来種の魚による捕食が絶滅危惧の要因となっています。

特記事項

和名は大虎斑蜻蛉、トラフトンボよりひとまわりおおきなことにちなみます。高山性のトンボです。

絶滅危惧Ⅰ類　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

キバネセセリ　*Burara aquilina chrysaeglia*　セセリチョウ科

左：オス　右：メス

種の特徴

前翅長2.3cmでセセリチョウ科としては大型種です。成虫は、体全体が茶色味がかった黄色で、とくに雌は明らかに雄より大型です。飛んでいる姿だけでも区別がつきます。年1回7月上旬～下旬にかけての発生で、幼虫はハリギリ（ウコギ科）の葉を食草としています。他の雑木と共に育つハリギリの混じる雑木林が生育場所で、幼虫で越冬します。成虫は、特に大型で目立ちます。飛び方も他の科の個体より早く、各種の花で吸蜜しますが、獣糞にとまることもあります。

国内や県内の分布

種子島、屋久島以南を除いた日本各地に分布があります。関西中部では、山地性の種となっています。以前は県内の各地のやや浅い山から深い山までどこにでもいましたが、現在は姿を見かけることが稀になりました。

市内の状況と絶滅危惧要因

五里ヶ峯防火帯でわずかに記録しました。開けた場所で、まわりは針葉樹が入り込んだ雑木林です。ササやイネ科の雑草が茂る草原の上を飛んでいます。しかし現地調査で見かけた個体数はわずかです。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：絶滅危惧Ⅱ類

アカセセリ　*Hesperia florinda*　セセリチョウ科

▲オス

種の特徴

前翅長1.5cmでセセリチョウの仲間としては小型の仲間に入ります。翅の裏面が全体として黄色味が強いので、この点に注目すると、とまっている時でもかなり他の種とは区別できます。

７月下旬～８月上旬に発生し、カモジグサ（イネ科）の仲間やヒカゲスゲ（カヤツリグサ科）を食草としています。標高900m前後の高原の草原で８月上旬～９月上旬に年１回の繁殖、卵で越冬します。

この仲間としては、やや小型で、雄の前翅後部が多少へこみます。

国内や県内の分布

本州の中部地方、関東北部の山地のみに分布します。県内の各地の山地から記録されていますが、その数はかなり少なくなっているように思われます。

市内の状況と絶滅危惧要因

葭生林道、五里ヶ峯防火帯のみでわずかな個体数を確認しています。現地は、針葉樹が少々混じる雑木林に囲まれ、ササやイネ科植物が育っています。調査で確認された個体数はわずかで、他のセセリチョウ科と混飛していました。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：準絶滅危惧

ギンイチモンジセセリ　*Leptalina unicolor*　セセリチョウ科

▲メス

種の特徴

セセリチョウの小型種ですが、翅が細長いです（前翅長1.5cm）。

名前のように、後翅裏面に銀色の太い縦条の銀白色紋があります。他に類似のセセリチョウ科の種はないので、はっきりわかります。６月上旬～下旬（年１回）発生します。幼虫はススキ（イネ科）の仲間を食べます。ススキの育つ乾燥草原で、初夏のほんの短い時期に繁殖行動が見られます。幼虫のまま越冬します。セセリチョウの仲間としてはガに近い感じを受けます。成虫は草葉上にとまり、花に来ることは少ないです。

国内や県内の分布

北海道から九州まで、しかも高地から低地の丘陵地にも生息します。しかし、どの地においても、個体数は少なく、局所的な傾向が強いです。県内も同様です。

市内の状況と絶滅危惧要因

葭生林道、五里ヶ峯防火帯ほか数カ所で記録しています。針葉樹が混じる雑木林に囲まれた開けた明るい草地に飛んでいます。個体数はそれほど多くはないですが、はっきりわかるくらいな数は飛んでいます。

絶滅危惧Ⅰ類　　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：準絶滅危惧

スジグロチャバネセセリ　*Thymelicus leoninus*　セセリチョウ科

▲メス

種の特徴

セセリチョウ科としては、小型種です（前翅長雄1.3cm、雌1.6cm）。
ヘリグロ・ヒメキマダラ・スジグロのチャバネセセリの３種はよく似ているので、注意が必要です。スジグロチャバネセセリの雄は前翅中央の黒い線状性斑が目立つので、そこが見分けるポイントとなります。７月中旬～８月上旬に年１回発生します。カモジグサ（イネ科）、カヤツリグサ科の一種などを食草としています。
標高800～1000mほどの開けた草原や雑木林の縁の草原などに飛んでいます。かなり広く分布しますが、いずれの場所でも個体数は少ないです。

国内や県内の分布

北海道から四国を除いて九州熊本県まで生息しています。県内には、各地のやや高地の草原などに分布し、かつては数も多かったのですが、現在はかなり個体数が減少しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲市の最高峰である大林山頂、五里ヶ峯防火帯などで確認されています。1000m程度の高原状の開けた草原に素早く飛び、小さな体を見せています。チャバネセセリの仲間は体が小さく動きが早いです。個体数は多いとは言えませんが、各所で見ることができます。

絶滅危惧Ⅰ類　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

スギタニルリシジミ　*Celastrina sugitanii*　シジミチョウ科

▲メス

種の特徴

雌雄ともほぼ同じ大きさです（前翅長1.4～1.5cm）。
近縁種のルリシジミとよく似ていますが、本種の裏面がちょっと黒味が強いこげ茶色であることから、区別がつきます。ルリシジミと春先に混飛します。５月上旬のかなり限定された期間に発生します。幼虫は、トチノキの花と実を食草としています。大きなトチノキが育っている付近に５月上旬に飛びますが、場所は限定されています。蛹で越冬します。年１回の発生です。ルリシジミと混飛するのは春先のみです。

国内や県内の分布

北海道から九州まで分布しています。しかし、いずれの地においても、数はそう多くありません。また、発生時期も限定されるので、人目に付きにくいです。

市内の状況と絶滅危惧要因

食樹であるトチノキの近くの空間のみで飛んでいます（三滝川上流）。トチノキの近くにルリシジミと混飛しています。本種の方が個体数が少ないです。生息場所は限定されます。飛んでいる個体数も少なめです。生息数は少なく場所も限定され、トチノキに依存しているので、この木の伐採があると絶滅が危惧されます。

特記事項

出現する時期が短いので、この時期に集中して調査すれば他にも生息地が発見される可能性もあります。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

メスアカミドリシジミ　*Chrysozephyrus smaragdinus*　シジミチョウ科

左：オス　右：メス

種の特徴

ゼフィルスの仲間のうちでは、やや体が大きい部類に入ります（前翅長2.2cm）。
雄の翅表の輝きはメタリックグリーンの中でも特に美しいです。雌は名のとおり全体が黒い翅表中央に大きな赤い紋が目立ち、他種との差を見せつけています。６月下旬～８月上旬（年一回）の発生です。マメザクラ、カスミザクラなどのバラ科を食草としています。サクラの仲間が生育する浅い山の雑木林の間を活発に飛びます。卵での越冬です。
雌雄の翅表の斑紋の差の大きい代表的な種です。

国内や県内の分布

国内では、北海道から九州まで分布しますが、いずれの地でも個体数は多くありません。ゼフィルスの仲間としては、早い時期の６月に飛びます。比較的浅い山でみられることが多い種です。

市内の状況と絶滅危惧要因

女陰の滝付近の自動車の通る道路際の雑草の上に静止中の本種を確認しました。車道の明るい空間で、まわりの雑木林から飛来したものと考えられます。個体数は限定されているものと推測されます。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ハヤシミドリシジミ　*Favonius ultramarinus*　シジミチョウ科

左：オス　右：メス

種の特徴

雌雄ともほぼ同じ大きさで、前翅長2.0cm前後です。ゼフィルスの仲間では、ほんの少し大きいかな、という感を受けます。雄の輝きは、やや空色が強く、雌の裏面はややこげ茶色が濃く、白線が強いです。６月下旬～７月上旬に発生します。
幼虫は、カシワ林にのみ生息し、成虫もカシワ林に限定されています。卵で越冬し、成虫がカシワ林に見られるのは、幼虫がカシワのみ食草として大きくなるからであると考えられます。

国内や県内の分布

千曲市のカシワが生育する林には本種が生息しているものと推測されますが、今のところ、産地はかなり局所的です。

市内の状況と絶滅危惧要因

一重山の一部でみられます。カシワは一重山のかなり広い範囲で生育していますが、この種の産地は限定されています。生息地はかなり大きいです。また、発生期には個体数も多いです。千曲市にはカシワの生育地が多いですが、ハヤシミドリシジミの分布は限定されています。

特記事項

千曲市では、分布地はかなり限られているので、保護していく必要があります。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ミドリシジミ　*Neozephyrus japonicus*　シジミチョウ科

▲メス

種の特徴

雌雄とも前翅長2.0cm前後です。
市内産のミドリシジミの近縁種は、エゾミドリシジミ、オオミドリシジミ、メスアカミドリシジミ、ジョウザンミドリシジミ、ハヤシミドリシジミと本ミドリシジミの６種ですが、このうち最も緑色が強いのが本種です。７月中旬ごろ発生します。ハンノキを食草とし、成虫はあまり花に来ません。雑木林の裾野に点在するハンノキの一部にわずかに生息しています。卵で越冬し、幼虫が食べるハンノキの付近のみで見られます。

国内や県内の分布

北海道から九州までの各地に分布していますが、どの場所においても産地は限定されています。

市内の状況と絶滅危惧要因

今のところ、戸倉、羽尾地区のわずかな場所でのみ確認されています。民家に近い雑木林の裾野の一角に残る数本のハンノキ林が生息場所と考えられます。個体数は極めて少ないものと推測されます。

特記事項

他にもかなり大きなハンノキやハンノキ林があるのに、なぜこの場所でのみでしか見られないのか調べていく必要があります。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：留意種　環境省：準絶滅危惧

ヒメシジミ　*Plebejus argus micrargus*　シジミチョウ科

▲オス

種の特徴

近縁のミヤマシジミ、アサマシジミに比べるとやや小さいです（前翅長1.3cm）。
ヒメシジミ、ミヤマシジミ、アサマシジミの近縁種３種を比較すると、ヒメシジミが翅全体が最も明るい色です。白色系の鱗粉が発達しているからです。６月下旬～７月上旬（年１回）発生します。エゾヨモギ、マアザミ（キク科）、イタドリ（タデ科）などを食草としています。生息場所は、標高1000m前後の開けた草原です。卵での越冬で、生息地は非常に限られていますが、場所によっては狭い場所にたくさん飛翔していることがあります。

国内や県内の分布

北海道から九州にわたって分布していますが、四国にはいません。県内では、各地に広く分布していますが、産地は限定されています。

市内の状況と絶滅危惧要因

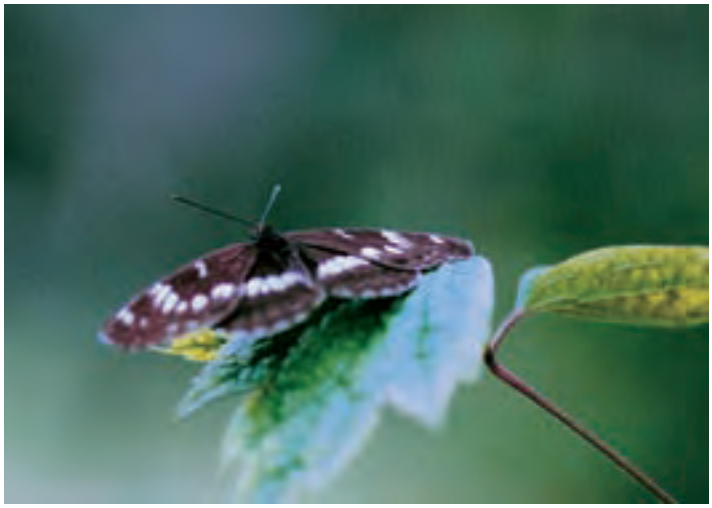
樺平付近のほんの限られた数箇所で分布しています。開けた草原の上を飛んでいますが、場所が限定されます。個体数は発生の最盛期にはかなり目に付きます。産地はほんの限られた場所で、いまのところ１箇所です。

特記事項

産地はほんの限られた場所ですが、念入りにさがせば発見される可能性もあるようにも思われます。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

アサマイチモンジ　*Ladoga glorifica*　タテハチョウ科



▲オス

種の特徴

近縁のイチモンジチョウよりやや大きいです。成虫の近縁種イチモンジチョウとの区別点は、前翅裏面中室の白斑がアサマイチモンジではっきりと出ます。また、前後に通る白点は切れることがありません。６月下旬から８月に年１～２回発生します。

スイカズラ科の植物を幼虫が食べます。里山のスイカズラの育つ浅い雑木林や河川敷の林縁などに生息、幼虫で越冬します。近縁種のイチモンジチョウと混飛しますが、本種の方が活発なようです。

国内や県内の分布

日本特産種で、本州にのみ分布しています。県下では各地に広く分布しているのに、千曲市ではほとんど見かけることがありません（要調査）。

市内の状況と絶滅危惧要因

大池キャンプ場にて１個体確認したのみにとどまります。まわりは雑木林に囲まれた空き地で、これまでの調査でも一度しか確認できなかったため、個体数はかなりすくないものと推測されます。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

オオミスジ　*Neptis alwina*　タテハチョウ科

▲オス

種の特徴

ミスジチョウ類の中では最も大型で、前翅長4.5cmを超えます。近縁４種の大きさは、コミスジ＜ホシミスジ＜ミスジチョウ＜オオミスジで、この仲間では最大の大きさです。いずれの種も翅を開くと横３本の白線が目につきます。

７月上旬～８月に年１回発生します。ウメ、アンズ、スモモなどの果実のなるバラ科植物を食草としています。食草の関係から、人里にむしろ多く浅い山にも発生しています。

幼虫で越冬します。ミスジチョウ独特のパッパッスーの飛び方をします。その中で最も派手なのが本種です。

国内や県内の分布

北海道から伊吹山脈まで広く分布しています。県下にも、各地で見かけますが、千曲市ではみかけることは少ない種です。

市内の状況と絶滅危惧要因

桑原の三和峠にて本種の雄を確認しています。峠の山道を登り詰めた山荘横の雑木林の空間をゆったりと飛翔していました。個体数はかなり限定されるものと推測されます。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：留意種　環境省：準絶滅危惧

ヒョウモンチョウ　*Brenthis daphne rabdia*　タテハチョウ科

▲メス

種の特徴

前翅長が雄は2.5cm前後、雌は3.0cm前後です。近縁のコヒョウモンと比べると、やや小型で、斑紋が大変よく似ています。間違いやすいのですが、全体を眺めると、前翅が四角っぽいところで区別がつきます。６月下旬～７月中旬の発生で、先に雄、後半は雌のみが発生してきます。食草はワレモコウ類で成虫は各種の花に集まり吸蜜します。幼虫の形で越冬しています。雄は群飛することがありますが、このところ個体数がかなり少なくなっています。

国内や県内の分布

県内のあちこちで記録があり、そう数の少ないものではありませんが、千曲市では調査時に出会うことが少ない種でした。

市内の状況と絶滅危惧要因

今のところ確認できたのは大池湖畔のみでした。大池のまわりの草原を活発に飛び回っていますが、出現のタイミングのずれがみられます。確認地での２度にわたる調査では、２～４頭の群が確認できました。草地の自由な手入れなどが影響したと考えられますがはっきりしたことはわかりません。

特記事項

ヒョウモンチョウの仲間の記録（ミドリヒョウモン、ツマグロヒョウモン、ウラギンスジヒョウモン、オオウラギンスジヒョウモン、メスグロヒョウモン、ウラギンヒョウモン、クモガタヒョウモン、ギンボシヒョウモンの各ヒョウモンチョウ８種）に１種加わり大変喜ばしいことです。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：留意種　環境省：準絶滅危惧

ヒメギフチョウ　*Luehdorfia puziloi inexpecta*　アゲハチョウ科

上：成虫
下左：幼虫
下右：卵

種の特徴

前翅長3.3cm前後でモンシロチョウより大きいです。成虫の形態はアゲハチョウの仲間としては、やや異色です。よく似ているギフチョウは市内には生息していません。４月中旬～下旬で年１回発生します。ウスバサイシン（ウマノスズクサ科）を食草とします。浅い里山の林の中の比較的明るい場所に生息します。蛹で越冬します。
この種はウスバサイシンという特殊な植物しか食べないので、この植物が生育している林の中にのみ住んでいます。

国内や県内の分布

近縁種のギフチョウと棲み分けており、北海道から本州中部にまで分布しています。県内でも県の中央部に近い所のあちこちに生息しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

倉科、森の林内に分布しています。上記の２地区以外にもウスバサイシンがありますが、生息は未確認です。数は多くはありませんが、確実に定着していると考えられます。ただし採取による絶滅もあり得ます。発生地の規模が小さいため、採集が絶滅に繋がることは確実です。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：情報不足　環境省：指定なし

オビカゲロウ　*Bleptus fasciatus*　ヒラタカゲロウ科

種の特徴

幼虫は体長約15mmで、体は平たく、大きな頭を持ちます。背中の中央に一列のトゲがあるのが特徴です。最近の研究では２年１世代であることが知られ、成虫は晩春～夏季に羽化します。成虫の翅には黒色の帯状斑紋があります。

生息環境

幼虫は、河川源流域の滝の飛沫がかかる濡れた岩や石の表面で見つかります。

国内や県内の分布

本州、四国、九州に分布し、県内では全県下にわたり分布すると思われます。

市内の状況と絶滅危惧要因

現地調査では三滝、久露滝、湯沢川の上流で生息を確認しましたが、生息地も少なく個体数も非常に少ないのが現状です。森林伐採による沢の水や湧水の減少、人の立ち入り等による生息環境の変化が懸念されます。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

マダラヤンマ　*Aeshna mixta soneharai*　ヤンマ科

青い個体：オス、緑色の個体：メス

種の特徴

体長約65mm、翅長約43mmで雄の複眼は青、雌の複眼は緑褐色に輝きます。雄の腹部には青色の斑紋があり、雌には黄緑色型と青色型の２型があります。７月中旬～８月中旬頃に羽化し、池から離れます。幼虫は、成熟すると９月～10月下旬に産卵します。ヤンマ類には珍しく、よくとまり、水平にとまることもあります。

生息環境

低地のガマ、ヨシ、フトイなどの丈の高い水生植物が密生する池沼に生息します。

国内や県内の分布

北海道、本州（東北、関東、中部の一部）に分布していますが、産地は局地的です。県内でも東信、中信、南信地方から記録がありますが、東信（上田市）以外極めて記録が少ないです。

市内の状況と絶滅危惧要因

上山田萬葉の里公園の池で確認しました。個体数は極めて少ないです。生息地の人工的な改修により、絶滅のおそれがあります。

特記事項

和名は斑ヤンマで上田市天然記念物です。

絶滅危惧Ⅱ類　　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：指定なし

カトリヤンマ　*Gynacantha japonica*　ヤンマ科

上：オス
下：メス

種の特徴

体長約75mm、翅長約45mmで複眼は雄では鮮やかな緑青色、雌は緑色です。胸部は緑色で腹部は第３節がくびれています。成虫は７月下旬から10月に発生します。幼虫は木陰の多い池沼、水田及び畦間の小流に生息し、８月下旬から10月ごろ、その湿った軟土や朽ち木などに産卵します。成虫は、たそがれ活動性が強く、日中は樹林で下枝に懸垂していることが多く、日の出前と日没後の照度500ルクスを割り込む頃から活動をはじめて、特に20～50ルクスの時にピークに達し、２ルクスより暗くなると、樹林の中にもどります。

生息環境

平地から山間地にかけての樹陰の多い池や水田に生息します。

国内や県内の分布

北海道南部、本州、四国、九州、沖縄諸島等広く分布しています。県内全域でも確認されています。

市内の状況と絶滅危惧要因

水田等で見られます。個体数は少なく、減少傾向が見られます。農薬の使用や生息地の減少により、個体数の減少が懸念されます。

特記事項

和名は蚊（小昆虫）を捕食するヤンマの意です。

絶滅危惧Ⅱ類　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ヒメアカネ　*Sympetrum parvulum*　トンボ科

左：メス　右：オス

種の特徴

体長約30mm、翅長25mmでアカネトンボの仲間では、最も小さく雄の腹部は赤くなり、第３～９節に黒斑があります。成虫は７月下旬から10月頃発生し、幼虫は水田や湿地の浮泥にまみれています。
滲出水のある水田で８月～10月に産卵します。

生息環境

低山地の水田や休耕田の湿地で生息します。

国内や県内の分布

北海道、本州、四国、九州などの比較的限られた産地で分布しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

桑原の山地の水田に発生します。個体数は極めて少なく、生息地の道路開発、休耕による湿田の減少が絶滅危惧の要因となっています。

特記事項

和名は姫（小さい、可愛い）茜色のトンボの意で、小さく可憐なことからつけられました。1990年頃まで市内でも数カ所の生息地がありましたが、今回の調査では雄１個体の記録のみでした。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：留意種　環境省：指定なし

ミネトワダカワゲラ　*Scopura montana*

トワダカワゲラ科

種の特徴

幼虫は体長が30mm前後で、他のカワゲラ類と形が異なり、鎧を身につけたような形をしています。氷河時代の遺存種で「生きた化石」とも呼ばれています。腹部末端には輪のような糸状のエラがあります。幼虫が成虫になるまで３～４年かかると言われ、成虫には翅がなく飛ぶことはできません。

生息環境

河川の源流付近で、夏季水温が10℃以下の細流に生息します。

国内や県内の分布

関東甲信越から西の山岳地域に分布し、県内では全県下にわたり分布しますが、生息地は分断されています。

市内の状況と絶滅危惧要因

現地調査では大池の弁天清水と佐野川上流で生息を確認しましたが、個体数は少ないです。
森林伐採による沢の水や湧水の減少、人の立ち入り等による生息環境の変化が懸念されます。また、成虫には翅がないため遺伝子隔離が心配されています。

特記事項

青森県の十和田湖で初めて確認されたためトワダカワゲラと呼ばれ、現在、日本には４種が知られています。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

ノギカワゲラ　*Cryptoperla japonica*

ヒロムネカワゲラ科

種の特徴

幼虫の体長は最大でも約10mmの小型のカワゲラです。体色は黒褐色で、体形は幅が広く、ずんぐりしてします。カワゲラの多くは動物食ですが、本種は付着藻類などを食べます。

生息環境

山地の渓流に生息し、ゆるやかな流れの石の下や、水しぶきがかかる石や岩の下に見られます。

国内や県内の分布

本州、四国、九州に分布し、県内では北部、中部、東部に分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

現地調査では三滝のみで生息を確認し、個体数も少ないですが、沢山川水系や佐野川水系の源流部にも生息するものと考えられます。
森林伐採による沢の水や湧水の減少、人の立ち入り等による生息環境の変化が懸念されます。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

キマダラセセリ　*Potanthus flavus*　セセリチョウ科

▲メス

種の特徴

セセリチョウ科としては、小型の仲間に入ります（前翅長1.3cm）。
この仲間はみな同じような色彩ですが、中でも目立って黄色のまだら模様が強い種です。この名がついたことが納得できます。７月中旬～８月上旬（年１回）発生します。幼虫はススキ、エノコログサ、チヂミザサ、メヒシバなどのイネ科の葉を食べます。イネ科の雑草を食べているので、人里に近い山麓や雑木林に生息します。
暖地では年２回発生しているようですが、千曲市では年１回と考えられます。

国内や県内の分布

トカラ列島中の島以北の各地に分布、かつては県内でも各地の浅い山で普通に見られましたが、現在あまり数は多くありません。

市内の状況と絶滅危惧要因

三和峠、磯部などに他のセセリチョウ科の種と混飛していました。人家に近い雑木林に囲まれた草原でせわしげに飛び交います。個体数は少ないですが、生息場所には確実に定着している感じです。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：絶滅危惧Ⅱ類

アサマシジミ　*Lycaeides subsolanus yagina*　シジミチョウ科

左上：オス（表）　左下：オス（裏）　右：メス（裏）

種の特徴

この仲間は総じて小型種に入りますが、アサマシジミは中でもやや大きいです（前翅長雄1.5cm、雌1.8cm）。ヒメシジミ、ミヤマシジミ、アサマシジミ等の近縁種はよく似ています。しかし、アサマシジミは大きいので（雄は特に）、目立ちます。雄の翅表は青藍色、雌は暗褐色ではっきり区別できます。７月上旬～中旬に年一回発生します。
ナンテンハギ（マメ科）、高所ではイワオウギ、タイツリオオギ（ともにマメ科）を食草とすることが知られています。開けた雑木林に囲まれた標高のやや高い草原に生息します。卵での越冬になります。草原にマメ科植物が生育する場所を選んで生息しています。

国内や県内の分布

北海道から本州中部にまで分布します。食草のまわりに集まってかなり狭い範囲にのみ生息しています。県内でも1000mを超える草原の食草の育つ周りにのみ飛翔しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

森の松尾沢、五里ヶ峯の防火帯など標高900～1000mの限定された場所に分布しています。現地を見た感じでは、個体数も少ないと考えられます。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

カラスシジミ　*Fixsenia w-album fentoni*　シジミチョウ科

▲メス

種の特徴

近縁のミヤマカラスシジミよりやや小さく、前翅長雄1.4cm、雌1.8cmです。
ミヤマカラスシジミによく似ていますが、裏面の白線が後翅では内側に入り込んでいます。
６月下旬～７月上旬（年１回）発生します。幼虫の食草はハルニレ（ニレ科）などです。
里山の雑木林に見られますが、数は少ないです。卵で越冬し、深山にいることもありますが、たいてい浅い山にいることが多いので、驚きます。

国内や県内の分布

北海道から九州にかけて所々で記録されていますが、四国には記録がありません。県内では各地で記録されていますが、分布は局所的で、広いハルニレ林がないので、個体数が少ないです。

市内の状況と絶滅危惧要因

一重山に生息しています。本種が記録された場所は、自動車もとおる道路脇の狭い場所です。雌雄たった一組のみの確認でした。個体数はかなり限定されているものと思われます。

特記事項

一重山での記録が唯一です。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ウラキンシジミ　*Ussuriana stygiana*　シジミチョウ科

左：オス（表）　右：オス（裏）

種の特徴

アカシジミ類と比較するとやや小型です。
ゼフィルスの仲間としては色彩があまりぱっとしませんが、名前のとおり、翅裏面全体が黄金色です。
６月下旬～７月に年１回発生します。
幼虫はコバノトネリコやトネリコ（モクセイ科）を食べます。生息場所は低山地の雑木林で、比較的浅い山の雑木林のまわりでひっそりと飛んでいます。

国内や県内の分布

北海道から九州にかけて各地で記録されていますが、山口県では記録がありません。県内では全県下にわたり広く生息していますが、県南部では記録のないところがあります。個体数は少ないです。

市内の状況と絶滅危惧要因

一重山に生息します。本種が記録された場所は自動車もとおる道路脇の場所です。たった一個体です。数はかなり限定されているものと考えられます。今のところ、一重山の記録が市内唯一です。

絶滅危惧Ⅱ類　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ウラミスジシジミ　*Wagimo signatus*　シジミチョウ科

▲メス

種の特徴

ゼフィルスの仲間としては、雌がやや大きいことが目立ちます（前翅長　雄1.6cm、雌1.9cm）。
名前のとおり翅の裏に目立つはっきりとした３つの筋が見られます。７月上旬～８月下旬までの年１回の発生です。コナラ、カシワ、ミズナラ、クヌギなどのブナ科の葉を食べています。
生息場所は、里山のコナラ、クヌギなどの雑木林ですが、あまり飛ばないので見つけにくい種です。卵で越冬します。見つかりにくい場所で蛹になるため、発見しにくいです。もともと個体数はあまり多くありません。

国内や県内の分布

北海道から九州の九重山まで分布しています。四国は分布なしです。県内では個体数は少ないですが、広い分布が見られます。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲市では一重山で見られます。カラスシジミ、ウラキンシジミ、ウラミスジシジミのシジミチョウ科３種の確認場所は、ほとんど同じ場所でした。上記３種とも、確認個体は各１個体程度でしたので、それぞれ個体数は限定されると考えられます。

特記事項

現段階では一重山での記録が唯一です。

絶滅危惧Ⅱ類　　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：指定なし

オオヒカゲ　*Ninguta schrenckii*　ジャノメチョウ科

上：成虫
右：さなぎ

種の特徴

日本産ジャノメチョウ科の最大種。前翅長4.5cmを超えます。雌に比べ、雄はやや小型です。
翅が大きいですが、眼状紋は割合小さいです。この眼状紋は裏面ははっきりと二重に円紋ができますが、表面は黒い点だけとなります。８月上旬～下旬の年１回の発生です。
カサスゲ、ヒゴクサ（カヤツリグサ科）などが食草です。いかにもカサスゲが生育しそうな川端や用水池の周りを飛びます。成虫はとまっていることが多いですが、背の高いカサスゲなどの間を飛ぶので捕まえにくいです。

国内や県内の分布

北海道と本州のみに分布しますが、産地はとびとびで、限定された場所にのみ生息しています。県内には広く分布していますが、国内分布状況と同様、とびとびの分布です。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲川の西の山間地のみに生息しています。大田原の用水池、小滑沢の２箇所です。用水池のカサスゲの葉上に静止していることが多いです。また小滑沢の人家のまわりでも一箇所確認できました。個体数は少ないです。成虫の採取による絶滅が危惧されます。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：指定なし

ヤマトタマムシ

Chrysochroa fulgidissima　タマムシ科

種の特徴

体長25～40mm、雌雄とも体下面は一様に金緑色ですが、背部は金緑色地に赤金色の広い縦帯紋が２条入ります。成虫は６～８月に発生し、成虫はエノキ、ケヤキ、カシなどの樹で見られますが、長野県ではサクラが多いようです。成虫が目につく率は、非常に少数個体で、たいてい一匹で、毎年続けて同一箇所では見つかりません。日常、日中高木の上を飛ぶことがあるようです。

生息環境

広葉樹林で少数個体が生育し、時に夜間外灯光などに誘引されるようです。暖地を好む上、発生量が少ないので、不明のことが多いです。

国内や県内の分布

これまで、県内では上伊那が初見で、以後、これまでに10箇所内外でしか確認されていません。日本では関東以南の温かい地方に多く見られます。

市内の状況と絶滅危惧要因

戸倉の山地、倉科神社で確認されました。生息状況、個体数の状況などはっきりしたことは不明です。当市に限らず、全県でも気候と発生個体数の関係があるらしいということがわかりました。

特記事項

美しい虫で、法隆寺の玉虫の厨子は有名です。ほかにタンスの虫除け、金銭増の守り神ともされています。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：指定なし

キンイロジョウカイ

Themus episcopalis　ジョウカイボン科

種の特徴

体長20～23mmです。一見甲虫類のイメージのない軟弱な昆虫ですが、紫、銅、緑、藍色の金属色があり、比較的大きいので目につきやすいです。７～８月頃に発生し、幼虫、成虫ともに他の小昆虫を捕らえて食べます。現況の自然界では、甲虫に興味を持っている者でも、容易に出会うことができないような珍奇な甲虫です。

生息環境

昆虫の採集方法の一つに捕虫網を振り回して捕るスウィーピングという方法がありますが、これによると、樹の葉、草木上に生活していますが、所在の特定はできません。

国内や県内の分布

本州、四国及び九州に分布し、県内の最近の記録は少ないです。

市内の状況と絶滅危惧要因

桑原地区でスウィーピングにより確認しましたが、ジョウカイボンの仲間自体、その生息状況は不明のことばかりです。落葉堆積土の多くある昆虫発生に好ましい樹林や原野が千曲市では少ないため、生息環境の少なさが絶滅危惧の要因と考えられます。

特記事項

ジョウカイボンとは、浄海と呼ぶ僧（坊）にちなむ名ですが、そのギャング的食性からは命名した理由が考えられません。甲虫らしくない甲虫（ホタルなど）を軟翅（鞘）類と呼ぶ場合もあります。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

ヒメボタル　*Hotaria parvula*　ホタル科

種の特徴

体長5.5～10.0mm程度で、ヘイケボタルのほぼ半分くらいの大きさです。発生時期は地域・産地によって異なります。陸産の巻貝類はほとんど餌としますが、カタツムリを好むようです。オスは翅があり飛行しますが、メスは翅がなく飛行しません。深夜に群飛します。

生息環境

山地に発生する陸生のホタルです。山林の林床で適度な湿り気のある落葉の下などを好みます。

国内や県内の分布

かつて耕作水田の土手などに発生することもありましたが、現在はおそらくそういう場所にはいないと考えられ、ごく稀に発生する場所があります。

市内の状況と絶滅危惧要因

冠着山山頂周辺の小範囲に分布しますが、個体数は多くありません。餌の量と関連し、多発はしませんが、限られた時期に一斉に発生するため、群発するように見えます。山地内の地表が、餌の貝類にとって適合するかどうかや、他の昆虫と餌を共有する所かどうかなどでも発生数は一定しません。

特記事項

県内の生息確認地は数カ所しかなく、これらも安定発生地ではありません。現状持続の難しい昆虫です。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：指定なし

ルイヨウマダラテントウ　*Epilachna yasutomii*　テントウムシ科

種の特徴

体長は6.5～7.0mmで、よく知られているオオニジュウヤホシテントウ（ジャガイモの害虫）と非常によく似ており、区別しにくいです（オオニジュウヤホシテントウの体長は約6.6～8.2mm）。
成虫は６～９月頃発生し、ルイヨウボタン、トチバニンジン、ジャガイモ、ヤマブキソウ、ハシリドコロなどに見られます。1970年に発見された種で、それまではヤマトアザミテントウやオオニジュウヤホシテントウと混同されていたため未知なことを含む種です。

生息環境

自然状態にあっては、山地の食草に頼ってひっそり生活していますが、農作物の害虫となるととたんに一転するでしょう。

国内や県内の分布

北海道から中部、関東地方に分布していることが判明しましたが、今後の報告により、分布域が変わることが予想されます。

市内の状況と絶滅危惧要因

冠着山の坊城平で初見しましたが、普通のテントウムシ類が見られる環境ではなく、想像もつかない山林原野で確認しました。状況は不明です。現在一般にはオオニジュウヤホシテントウが少なくなりつつあるので、それに代わる害虫となる可能性が大です。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

アオヤンマ　*Aeschnophlebia longistigma*　ヤンマ科

▲オス

種の特徴

体長約70mm、翅長約46mmで全身あざやかな黄緑色で、腹部、背面には二条の黒色条があり、くびれもなく、全体がずん胴型のヤンマです。成虫は５月下旬～８月上旬に発生します。幼虫の生息場所は池などで６月～８月にヨシなどの茎の中に卵を産みます。

生息環境

主に低地や平地のヨシやガマなどの背丈の高い挺水植物が茂る池沼などに生息しています。

国内や県内の分布

北海道、本州、四国、九州（北海道、東北地方では稀）に分布しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

稲荷山公園に生息しています。適度に手入れをされた公園の池で、個体数は極めて少ないです。

特記事項

和名は体色にちなむものです。タケヤンマと呼ばれることもあります。

準絶滅危惧　　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

ミルンヤンマ　*Planaeschna milnei*　ヤンマ科

▲メス

種の特徴

体長約75mm、翅長は雄が約48mm、雌が約53mmで複眼は雄が青緑色、雌が緑色です。胸部、腹部は黒地に黄色の斑紋があります。成虫は７月中旬～10月に発生します。幼虫は流れのゆるやかな植物性沈積物の多い淵やよどみに生息します。８月下旬から10月に、水際の湿った倒木や、朽ち木の柔らかい枯死組織内へ産卵します。通常、日中は林の中の下枝に静止していますが、早朝とたそがれ時に活動します。成熟した雄は渓流沿いに往復飛翔し、雌を探します。

生息環境

主に山間の樹林に囲まれた陰湿な渓流に生息します。

国内や県内の分布

北海道南部、本州、四国、九州に分布しています。県内各地から記録がありますが、多くはありません。

市内の状況と絶滅危惧要因

日影沢川、湯沢川、中村川、三滝川、沢山川に生息しています。これらの川は山地の渓流になります。
個体数は少なく、河川環境の変化で、個体数が減少する危険性があります。

特記事項

和名はイギリス人のミルン（J. Milne）に由来します。日本特産種です。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

クロサナエ　*Davidius fujiama*　サナエトンボ科

▲オス

種の特徴

体長約46mm、翅長約27mmで複眼は緑褐色、体色は黒地に黄色い条斑があります。胸部側面の２本の黒いすじは太いです。
５月下旬～７月に成虫が発生します。幼虫はゆるやかな流れの植物性沈積物のあるよどみの砂泥底に生息します。
６月～７月に水際のコケや丈の低い草の上でホバリングをしながら卵をばらまく方法で産卵します。

生息環境

主に山間の渓流に生息し、志賀高原（標高1600m）のような高所での記録もあります。

市内の状況と絶滅危惧要因

本州、四国、九州などに分布。県内にはやや広く分布しますが、産地は限られています。

特記事項

今回の調査では、雄１個体が確認されたのみです。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

コオニヤンマ　*Sieboldius albardae*　サナエトンボ科

▲オス

種の特徴

体長約83mm、翅長約53mmで体色は黒色の地に黄色い条斑があります。複眼は緑色で、後肢が著しく長いです。
サナエトンボ科の中で最大の種です。
６月下旬～９月に発生します。幼虫は流れの比較的ゆるやかな砂底にもぐっています。産卵は水面を打って、卵を水の中に放します。

生息環境

主に丘陵地から山地を流れる河川の上流ないし中流域に生息します。

国内や県内の分布

北海道、本州、四国、九州に分布します。県内各地に記録があります。

市内の状況と絶滅危惧要因

磯部で確認しましたが、個体数は少ないです。

特記事項

和名は小オニヤンマで、オニヤンマより小さいことからつけられました。

準絶滅危惧　　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

ウチワヤンマ　*Sinictinogomphus clavatus*　サナエトンボ科

▲オス

種の特徴

体長80～85mm、翅長約48mmで、大型のサナエトンボです。腹部第８節がうちわ状に左右に広がっており、雄の方が大きいです。
成虫は６月下旬～８月に発生します。

生息環境

平地や山間地の挺水植物や浮葉植物が茂る深く大きな池沼に生息します。

国内や県内の分布

本州、四国、九州に分布しています。
県内は広く記録があります。

市内の状況と絶滅危惧要因

治田池で確認しています。
人家に近いため池です。
個体数は極めて少ないと推測されます。

特記事項

和名は団扇状の付属物のあるヤンマの意味です。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

カラカネトンボ　*Cordulia aenea amurensis*　エゾトンボ科

▲オス

種の特徴

体長約46mm、翅長32mm、複眼は輝く緑色、胸部、腹部ともに金属光沢のある暗緑色、すなわち唐金色で、雌雄ともほぼ同じ形態・模様です。
成虫は５月中旬～７月に発生します。幼虫は、挺水植物の根ぎわや植物性沈積物の陰などに生息します。池沼の比較的岸沿いの草や樹が覆い被さるような水域で産卵します。

生息環境

主に寒冷地や高山の挺水植物や浮葉植物が茂る池沼で生息します。

国内や県内の分布

北海道、本州（岐阜県を南限とする東北地方や上信越などの山岳地域、寒冷地など）に分布しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

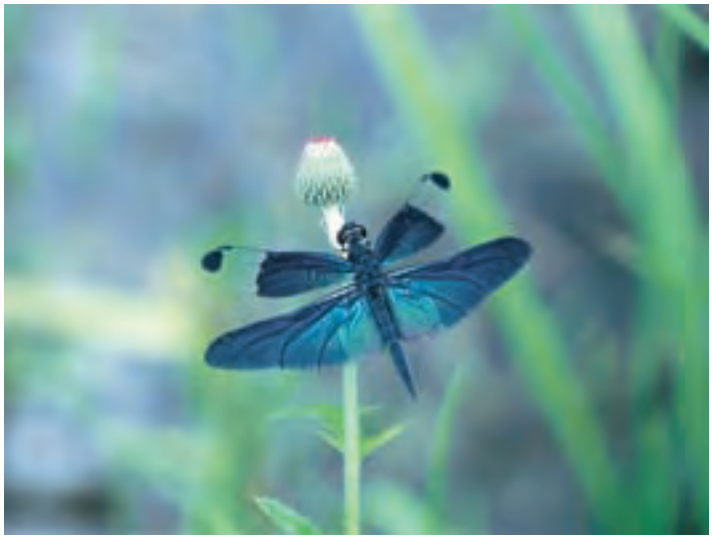
八幡地区、桑原地区のため池に分布します。個体数は極めて少ないです。

特記事項

和名は体色の唐金色からつけられました。高山性のトンボです。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

チョウトンボ　*Rhyothemis fuliginosa*　トンボ科



▲オス

種の特徴

体長約37mm、翅長約36mmで体色はほぼ全身が黒色で、無斑です。翅は後翅の幅がきわめて広く、雄は紫黒色、雌は金緑色に輝きます。

６月下旬～９月に成虫が発生します。幼虫は水生植物の陰や水底に生息します。７月～８月に浮葉植物のある水面に連続的に打水産卵します。

生息環境

平地や丘陵地のヒシなどの水生植物の繁茂する池に生息します。

国内や県内の分布

本州、四国、九州、屋久島に分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

八幡大池のため池に分布しています。

個体数は少なく、ため池の改修などにより、個体数の減少が懸念されます。

特記事項

和名は翅にチョウのような斑紋があることと、チョウのようにひらひらと飛ぶことによります。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

コノシメトンボ　*Sympetrum baccha matutinum*　トンボ科

▲オス

種の特徴

体長約42mm、翅長約33mmで、成熟すると、雄では顔面を含めて、ほぼ全体が鮮やかな赤色になります。翅の先端が黒褐色帯です。

成虫は７月～10月に発生します。幼虫は水底の植物性沈積物の陰や泥の上に生息しています。

８月～10月、田んぼの浅い水たまりや池沼で繁殖します。産卵方法は水生植物の生えた池の開放的な水面に、雌雄が連結したまま腹端を軽く水面に打って産卵します。

生息環境

主に丘陵地や低山地の水生植物の茂る池沼や水田などに生息します。

国内や県内の分布

北海道、本州、四国、九州に分布しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

八幡のため池に分布します。個体数は極めて少なく、減少しています。

特記事項

和名は小熨斗目蜻蛉で小さいノシメトンボの意味です。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

キトンボ　*Sympetrum croceolum*　トンボ科

▲オス

種の特徴

体長約40mm、翅長約30mmで、やや太身の中型の赤とんぼで、全身橙黄色を呈し、ほぼ無斑で、翅の大半が鮮やかな橙色です。成虫は８月から11月に発生します。幼虫は水生植物の根際や水底に生息し、９月～11月に開放的な池の湿った泥や植物などのあるところで繁殖します。産卵は雌雄連結して飛びながら、水面あるいは水際の湿った泥や、植物などに腹端を打ち付けて水滴と共に卵を付着させる行動をくりかえします。

生息環境

低山地の水生植物のあるやや深い池などに生息します。

国内や県内の分布

北海道、本州、四国、九州（北海道と東北地方北部及び九州南部では産地が局地化します）

市内の状況と絶滅危惧要因

八幡の山地のため池で確認しました。個体数は極めて少ないです。

特記事項

和名は黄色い蜻蛉の意味です。橙黄色した体色にちなんでいます。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：指定なし

マイコアカネ　*Sympetrum kunckeli*　トンボ科

上：オス　下：メス

種の特徴

体長約32mm、翅長約25mmで雄は顔面が青白色になり、腹部は鮮やかな赤色になります。雌の腹部は橙褐色のものと赤くなるもの（赤色型）があります。

７月下旬～10月に発生します。幼虫は水底に生息します。８月～10月に、水際の湿った泥面やごく浅い水面で連続打水、打泥産卵します。

生息環境

主に平地や丘陵地の水生植物が生い茂る腐植栄養型の池沼に生息します。

国内や県内の分布

北海道、本州、四国、九州に分布しますが、産地は比較的限られます。

市内の状況と絶滅危惧要因

八幡、稲荷山の公園の池に分布しています。
個体数は極めて少なく、水田やため池など生息地の人工的な改修により、個体数減少の危険性があります。

特記事項

和名は成熟した雄の顔面の青白色を京都の舞妓のうなじの白さに見立てて名付けたと言われています。

準絶滅危惧　　長野県：留意種　環境省：指定なし

チッチゼミ　*Cicadetta radiator*　セミ科

左：産卵痕　上：成虫

種の特徴

体長は約２cm前後で、翅の先までは約３cm。小型のセミで、翅は透明で体は黒色です。アカマツ林に生息し、８～９月に成虫が現れて「チッチッチッチ…」と鳴きます。卵はマツ林の林床に生えるツツジ類の幹や枝に生み付けます。

生息環境

低山地から山地のアカマツ林に生息します。

国内や県内の分布

北海道南部から九州に分布し、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

市内のアカマツ林に生息しますが、個体数は比較的少ないです。森将軍塚古墳では毎年産卵が確認されています。
アカマツ林の伐採による生息環境の変化や個体数の減少が懸念されます。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：準絶滅危惧

コオイムシ　*Appasus japonicus*　コオイムシ科

種の特徴

雌が雄の背中に卵を産卵し、雄が保護する有名な水生昆虫です。体長は約20mm、体色は淡褐色～褐色、体形は卵形で扁平です。水生昆虫や貝類、小魚、カエルなどを捕らえて体液を吸います。

生息環境

水生植物が豊富で水深の浅い池沼や用水路、水田などに生息します。

国内や県内の分布

本州から九州に分布し、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

現地調査では千曲川で生息を確認しましたが、個体数は比較的少ないです。
生息に適した池沼や用水路、水田の改修による減少が懸念されます。

準絶滅危惧　　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

タイコウチ　*Laccotrephes japonensis*　タイコウチ科

種の特徴

体長は35mm前後、体色は茶褐色から暗褐色で、カマに似た前足を持ち、尾部には呼吸するための細長い管を持っています。小魚などを捕らえて体液を吸います。

生息環境

水生植物が豊富で水深の浅い池沼や用水路、水田などに生息します。

国内や県内の分布

本州から沖縄県に分布し、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況と絶滅危惧要因

倉科の水田で生息を確認しましたが、個体数は少ないです。
生息に適した池沼、用水路、水田の改修や農薬散布による減少が懸念されます。

準絶滅危惧　　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

ウラナミアカシジミ　*Japonica saepestriata*　シジミチョウ科

▲メス

種の特徴

アカシジミ３種は、シジミチョウの仲間ではやや大型の部類に入ります（前翅長2.0cm）。
黒色の縞模様は非常に目立つので、飛んでいるときでさえ、はっきりとその種が同定できます。６月下旬～７月上旬（年１回）発生します。クヌギ（ブナ科）を中心に食草とします。他のブナ科からも卵がみつかります。人家に近い里山のクヌギ林を生育場所の中心としています。初夏の風をはこんでくれる感じです。卵で越冬します。アカシジミ３種の個体数では、ムモンアカシジミが最も少なく、続いてウラナミアカシジミ、アカシジミとなります。

国内や県内の分布

北海道、本州、四国にのみ分布しています。九州には生育していません。県内のあちらこちらにその姿を見せますが、いずれの地でも個体数は少なく、浅い山に限定されているように見えます。

市内の状況と絶滅危惧要因

一重山のような、人家に近い開けた市内各所の雑木林に分布します。浅い里山の主といった感で、日光を背に受けながら、時々飛びます。いずれの場所でも個体数はあまり多くありませんが、色彩からして、目立ちます。生息場所の林が薪炭として切り出されなくなったことが個体数が減少した要因として関係しているものと考えられます。

準絶滅危惧　　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

ムモンアカシジミ　*Shirozua jonasi*　シジミチョウ科

左：オス　右：メス

種の特徴

アカシジミ３種は、シジミチョウの仲間としては、やや大型の部類に入ります（前翅長2.0cm）。
アカシジミの仲間であることは、すぐわかりますが、名のように翅表に紋がありません。
８月中旬～下旬（年１回）発生します。
カシワ、ナラ、クヌギなどに産卵し、幼虫はこれらの植物に寄生するアブラムシを食べます。これらの植物も多少は食べる様です。生息場所としては、里山の雑木林が中心で、あまり高地にはいません。卵で越冬します。
発生地は局所的であり、発生期には必ず少数ではありますが、姿を見せます。

国内や県内の分布

北海道から本州中部の山地からのみ記録があります。県内では1976年に県下33箇所から記録がありますが、現在でも生息しているのはその1/4と言われています。

市内の状況と絶滅危惧要因

一重山や、大田原に近い田畑の残る開けた場所で見られます。
本種は飛翔力が強いので、雑木の上をかなり高く飛びます。個体数はかなり限定されています。

準絶滅危惧　　長野県：留意種　環境省：準絶滅危惧

オオムラサキ　*Sasakia charonda*　タテハチョウ科

上：メス　下：オス

種の特徴

前翅長が雄は5.0～5.5cm、雌は5.5～6.5cmで、日本を代表する華麗なチョウです。日本の国蝶にもなっています。特に雄の翅表が紫色の光る鱗粉で覆われており、光り輝きます。雌の鱗粉は光りません。７月上旬～８月下旬に年１回発生しています。エノキ、エゾエノキ（ニレ科）を食べます。クヌギを主にした雑木林のしみ出す樹液に集まります。里山のチョウといえます。幼虫で越冬します。前翅長が5.0cmを超える大型種で、特に雌は大きく、前翅長が7.0cmを超えるような個体もあります。雑木の上をゆうゆうと飛ぶのでとても目立ちます。

国内や県内の分布

北海道から九州本島まで広く分布が確認されています。また場所によっては個体数の多い場所もあります。県内では所々に産地があり、個体数も多いです。

市内の状況と絶滅危惧要因

市内の中心を占める平地のまわりの標高600～700mより低い、人家に近い山間地で分布しています。エノキが多いからとも考えられます。それぞれの山間地には個体数はあまり多くはありませんが、本種が生息していると考えられます。食草のエノキが不要材として伐採されていることが本種が少なくなる要因とも考えられます。

準絶滅危惧　　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

マエモンシデムシ　*Nicrophorus maculifrons*　シデムシ科

種の特徴

体長13～25mm、体は黒色地で体背面に巾広い桃黄色紋が目立ちます。時に紋内に黒点紋があり、和名はこれにちなみます。成虫の発生時期は６～10月です。シデムシとは埋葬虫と書きますがその名のように、動物の死体や糞に集まります。食物にありつくと、その付近の土中に餌を運んで埋め、そこに産卵して、幼虫の保育もします。夜行性で臭覚がよく発達しています

生息環境

上記のような食物のある場所には、たいていシデムシ類が集まりますが、これまでの調査では、標高によってその種が異なる傾向があります。

国内や県内の分布

ベイトトラップによって、シデムシ類を集めると相当の種類と量が生存していることがわかりますが、現況調査を細部ですることにより、今後詳細が明らかになると考えられます。

市内の状況と絶滅危惧要因

上山田の八頭山（標高950m付近）で確認されました。ベイトトラップ等を用いて克明な調査をしない限りわかりませんが、個体数が少ないとすると鳥獣類の数や腐葉土等が少ないための理由かと考えられます。

準絶滅危惧　　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：指定なし

コカブトムシ　*Eophileurus chinensis*　コガネムシ科

種の特徴

体長18～24mmで小型のクワガタムシと紛らわしいですが、体全体光沢がありません。雌雄とも、頭頂を微毛におおわれた短角があります。胸部の上、中央が浅く縦にへこんでいます。成虫は４～10月に発生します。朽ち木の中でその木をかじって生活していますが、他の昆虫の幼虫を好んで食べる肉食性もあります。

生息環境

生息に好適な場所はかなりあるにもかかわらず、なぜか少数個体しかみつからないのが不思議です。

国内や県内の分布

県内では、北部と中部で記録されています。

市内の状況と絶滅危惧要因

新山の見性寺の桜の古木の中より発見しました。発見地では、他に何十匹も生育できそうなスペースがあったのに、オス一匹だけの発見でした。カブトムシの飼育業者は、幼虫を本種に食べられないように苦心するそうですが、自然状態ではほとんど眼につかないことが不思議です。

特記事項

コカブトムシの自然界での現況はどのようであるか、詳細はわかっていません。

情報不足　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ヘイケボタル　*Luciola lateralis*　ホタル科

左：ヘイケボタル　右：ゲンジボタル

種の特徴

成虫の体長は7～10mm、前胸部が赤色で、中央に縦の黒い紋があります。幼虫の体長は最大で約20mmで、イモムシのような形をしています。幼虫はモノアラガイなど食べて成長し、土の中でサナギとなり、6～8月頃に成虫に羽化します。

生息環境

水田や水田脇の用水路、池沼などの止水域に生息します。

国内や県内の分布

北海道から九州に分布し、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況

市内の水田地帯に生息していますが、詳しい生息情報は分かっていません。水田への農薬散布や休耕田が増えて乾燥化が進んだことにより、ゲンジボタルよりも生息地や生息個体が減少していると言われています。

地域個体群　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

ウエダエンマコガネ　*Onthophagus olsoufieffi*　コガネムシ科

種の特徴

体長は5～7mmで鳥獣の糞を餌としています。コガネムシで小さいながら、頑丈な体と脚を持っています。体色は黒く光沢は少ないが、力持ちです。雌雄とも頭頂に短い角をもっています。成虫は5～11月頃発生し、繁殖します。糞虫といわれるが、現状は飼犬の糞の放置されたもので生きています。拡大しないとわかりませんが、頭頂の角は雌雄で異なります。

生息環境

上田で発見されたものが、千曲川で流下して運ばれ、上山田万葉の里スポーツエリアで再発生したものと考えられます。

国内や県内の分布

分布はきわめて極所的で昭和11年（1936年）に発見され、続いて佐久で数カ所見つかりました。その後須坂市などでも発見されましたが、餌の関係でどこも乏しいです。日本特産種です。

市内の状況と絶滅危惧要因

上山田万葉の里スポーツエリアの運動場周辺で確認されました。犬の糞を探すと見つかる程度です。飼い犬の糞の放置がこの個体数に影響します。またドッグフードはどんな影響を及ぼすか今のところわかっていません。

特記事項

頭頂の角の雌雄の別で、別種とされた歴史もあります。

留意種　長野県：指定なし　環境省：指定なし

キイトトンボ　*Ceriagrion melanurum*　イトトンボ科

▲オス

種の特徴

体長約37mm、翅長約20mmで真っ黄色のやや太身のイトトンボです。雌は緑がかっています。雄の腹部第７～10節の背面に黒い条斑があります。
成虫は６月～９月に発生します。７～９月に、雌雄が連結して水生植物の中に産卵します。このとき、雄は直立の姿勢です。

生息環境

成虫、幼虫ともに挺水植物が茂る池沼や湿地などに生息します。

国内や県内の分布

本州、四国、九州に分布しています。
県内では各地で確認されています。

市内の状況と留意要因

八幡の平沢池に生息しています。池の中の植物と周りの草地がほどよく整備され保たれています。個体数は多いのですが、千曲市ではこの平沢池のみの確認なので、池の改修などがあると生息地の環境が変わり生息数の減少に繋がるおそれがあります。

特記事項

今回の調査では、市内一箇所のみの記録にとどまっているため、留意種として監視を続ける必要があります。和名はその特徴的な体色にちなみます。

留意種　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

クロスジギンヤンマ　*Anax nigrofasciatus nigrofasciatus*　ヤンマ科

▲メス

種の特徴

体長約78mm、翅長約48mmで、複眼は青藍色に輝き、胸部は黄緑色で２本の黒条があります。腹部は黒色で雄は青の斑、雌では黄緑色の斑紋が入ります。成虫は５月上旬～７月の発生で、幼虫の生息場所はやや深い池です。同じ頃、水生植物の組織内に産卵します。

生息環境

主に、平地や山地の比較的木陰の多い小規模な池沼などに生息します。

国内や県内の分布

本州、四国、九州及び種子島に分布しています。
県内でも全域に分布しています。

市内の状況と留意要因

市内全域に分布しています。ため池や、公園の池などで見かけます。個体数は多いですが減少傾向です。

特記事項

和名は黒い条のあるギンヤンマの意味です。胸側にある２本の黒色条にちなんでいます。

留意種　長野県：準絶滅危惧　環境省：指定なし

ギンヤンマ　*Anax parthenope julius*　ヤンマ科

左：オス　右：メス

種の特徴

体長約80mm、翅長約55mmで、複眼と胸部は緑色で、腹部２～３節は、雄が青色、雌が黄緑色です。翅は老熟した雌では濃褐色にけぶる傾向が強いです。成虫は５月～10月に発生します。幼虫は池、水田、流水の緩やかな河川に生息しています。６月～10月、水生植物の生体組織内や、柔らかい朽ち木などに産卵します。産卵は大型種にしては異例の雌雄連結静止型で行ないます。

生息環境

平地や丘陵地、低山地の水生植物などが茂る開放的な、比較的大きな池沼や水田などに生息します。

国内や県内の分布

北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布しています。県内に広く分布しています。

市内の状況と留意要因

市内全域で見られます。ため池や水田、用水路などに生息しています。個体数はやや多いのですが、減少傾向にあります。

特記事項

和名は、腹部第３節の側面下部にある銀白色紋に由来しています。

留意種　長野県：指定なし　環境省：準絶滅危惧

ウラギンスジヒョウモン　*Argyronome laodice japonica*　タテハチョウ科

上：オス　下：メス

種の特徴

雌雄とも斑紋の差はありませんが、雌は雄よりずっと大型です。前翅長3.5cmを超えるものが多いです。名のとおり翅裏に白色の前後の翅を這う帯状の紋がはっきりとわかります。近縁のオオウラキンスジヒョウモンは前翅の翅端が丸みをおびず、とがります。

発生時期は７月上旬～９月上旬の年１回です。幼虫の食草はスミレ類です。生息場所は800ｍ以上の高地草原です。夏眠に入ることが知られており、盛夏に一時姿を消します。幼虫の形で越冬しています。高原の各種の花にあつまり、個体数の増減が見られます。

国内や県内の分布

北海道から九州対馬まで分布しますが、種子島、屋久島では確認されていません。県内では、やや高地の草原に多く見かけます。場所によってはかなりの個体数を見ることがあります。

市内の状況と留意要因

葭生林道、五里ヶ峯防火帯、千曲高原などの山間の道路際や尾根筋に開けた明るい草原の花にきています。

上記の確認地以外でも見られ、千曲市内では、そう少ないものでもないように思われます。

留意種　長野県：準絶滅危惧　環境省：絶滅危惧Ⅱ類

ヒメシロチョウ　*Leptidea amurensis*　シロチョウ科

▲メス

人里から浅い高原にその姿を見せています。

種の特徴

前翅長2.3cm前後で、シロチョウの仲間としては最小です。このような弱々しい姿のチョウが春先に雪が消えたと同時に飛ぶのを見ると、「よくぞがんばって生きていてくれた」と思います。

５月上旬～下旬（春型）、７月（夏型）の年２回の発生です。ツルフジバカマ（マメ科）を食草としています。

人手の入った耕作地の畔端の草原上を弱々しく飛んでいます。年２回の発生ですが、夏型は意外に少ないものです。

国内や県内の分布

北海道の南部から九州にまで分布していますが、かなり限られた場所にのみ生息していることが知られています。四国には生息しません。県下では、

市内の状況と留意要因

千曲高原、姨捨棚田、桑原の水田、大田原の水田などに分布しています。時々草刈りの行なわれている畔の上をゆっくりと飛んでいます。発生期にはかなりの個体数が見られます。水田の畔を草刈りすることが食草の維持に役立っています。水田の利用状況が今のまま続けば生息も維持しますが、耕作放棄された場合、個体数の減少が懸念されます。

留意種　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ハンミョウ　*Cicindela chinensis japonica*　ハンミョウ科

種の特徴

体長18～20mmで、背面が緑藍色の金属光沢の地に赤黄、白などの斑紋をあしらい、長い脚を持っています。成虫は５～９月に発生します。地表を徘徊し、小昆虫を食べます。山林の道路等で、人々を案内でもするかのように飛ぶことから、ミチアンナイ、ミチオシエ、ミチシルベなどの俗名があります。

生息環境

切り通しの道端、崩落地面などに、垂直な穴を掘り、その中で幼虫は地面を通る小昆虫を捕らえて食べます。土質はローム土、または、それ様の粘性のある土質を好みます。

国内や県内の分布

珍、貴、稀少の甲虫ではありませんが、生息域が土質の関係で限定されています。発生個体数も多くありません。

市内の状況と留意要因

桑原の不動滝林道のガレ場で確認しましたが、極めて悪質な土質です。しばらく探してようやく眼につくほどの発生数です。市域にこの種に好適な土質の土地がないため、この場所に生息していること自体稀な現状でしょう。

特記事項

保護にあたっては、土砂崩落防止などすれば多少は援助できるのではないでしょうか。

留意種　長野県：留意種　環境省：指定なし

ゲンジボタル　*Luciola cruciata*　ホタル科

左：ヘイケボタル　右：ゲンジボタル

種の特徴

成虫の体長は14mm前後で、前胸部が赤色で、中央に十字の黒い紋があります。幼虫の体長は最大で約30mmで、イモムシのような形をしています。幼虫はカワニナを食べて成長し、土の中でサナギとなり、６月下旬頃に成虫に羽化します。

生息環境

比較的水がきれいで、自然状態の保たれた細流や小河川に生息します。

国内や県内の分布

本州、四国、九州に分布し、県内では全県下にわたり分布します。

市内の状況と留意要因

市内では大きく分けて10箇所で毎年ゲンジボタルが発生しています。このうち、千曲川左岸の八幡地区や羽尾地区、協和地区など５箇所では自然発生しています。最近のホタル保護活動により、発生地や個体数は増加傾向にありますが、遠隔地域の個体の移動や放流により、自然個体群への遺伝的撹乱が危惧されます。

特記事項

千曲市でも市民の方々の取り組みにより、以前ホタルが発生していた場所の生息環境の改善、近隣の個体（幼虫）の放流により、発生場所が増えてきています。

留意種　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ヤハズカミキリ　*Uraecha bimaculata*　カミキリムシ科

種の特徴

体長15～25mm程度で、雄の方が大きい傾向にあります。体は細長く、いわゆるカミキリムシ型で、体色は褐色系、全体に微毛があります。背面に黒色の大きい矢羽様の紋があります。雄は体長の2.5倍くらいの長さの触角を持ちます。５～８月頃発生します。ネム、サクラ、ツクバネガシなどの広葉樹に成虫が見られ、広葉樹の枯れ枝に幼虫が育ちます（細部不明）。外灯に近い山林の成虫は光に集まる性質があるようです。

生息環境

程よく成長した広葉樹林で落葉などの厚い堆積に地表が覆われているような、明るくない山林で、夏～秋に出現した成虫は丸まった枯葉に潜んでいます。

国内や県内の分布

北海道から種子島付近まで分布し、各地に亜種が生息しています。県内の個体は極めて少ないと考えられますが、詳細は不明です。

市内の状況と留意要因

八幡地区の聖・冠着線で発見。上記の通り良好な生息環境ですが、確認したのは一個体。個体数についても不明です。良好な地理的環境がありますが、森林の不足が絶滅の危険性につながります。

特記事項

カミキリムシ類は分類の見通しがほぼついた位の現況で、これから地方の自然の中での生息状況など、不明なことがわかってくるでしょう。

留意種　長野県：指定なし　環境省：指定なし

サメハダチョッキリ　*Byctiscus rugosus*　オトシブミ科

種の特徴

体長6.5mm内外で、ゾウの鼻を思わせるように口の部分が長いです。体色は金緑色で、拡大してみると、体表面が鮫肌状に見えます。脚、口が頑丈で、広葉樹の上で生活するのに好適な爪と脚を備えています。６～８月に発生します。

成虫は、ポプラ、リンゴ、サクラ、コナラなどの葉を巻き、卵を産み付けて落とします。幼虫はこれによって育つと言われます。手紙を巻物として落とすのがオトシブミで、葉を切り落とす意味でのチョッキリ属とは別のグループです。

生息環境

種の好む植物（広葉樹）の葉上で生活し、好む葉に産卵し、これを中心に葉を巻物のようにして落下させます。これらの作業に適する諸条件の整っている場所に生息します。

国内や県内の分布

北海道・本州など比較的寒い地方や高地に分布します。

市内の状況と留意要因

大池の池の端で成虫を確認しました。環境は昆虫の生息に好適な条件を備えた良好な場所です。一日調査して一頭のみの確認にとどまりました。当地のような良好な場所が少ないことが個体数減少の危険性につながります。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ムツバハエトリ

【六歯蝿取蜘蛛】
Yaginumanis sexdentatus（雄の牙堤に６つの歯がある）

ハエトリグモ科

種の特徴

体長は雌が７～９mm、雄は６～７mmで、雌雄ともに腹部背面は灰、黄、褐、白色を交えた複雑な斑紋があり、後方の菱形に囲まれた斑紋が目立ちます。
成熟期は５～８月です。

生息環境

湿り気に富んだ薄暗い岩場、崖地、石垣の表面、またはそのような所にある神社、案内板、樹皮表面に生息します。

国内や県内の分布

福島県以南各地に記録がありますが、県内では長野市に記録があるのみです。

市内の状況と絶滅危惧要因

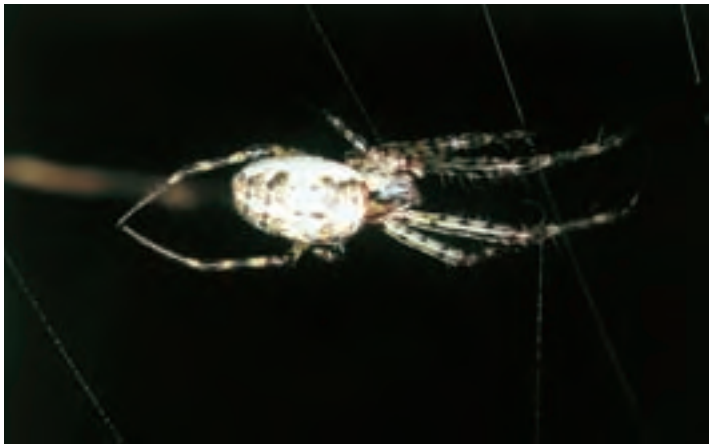
倉科の三滝、八王子山の尾根道で確認しました。現在は生育環境が保全されています。生息密度が低く、生息環境が山火事や伐採などで乾燥が進むと絶滅のおそれがあります。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

キタドヨウグモ

【北土用蜘蛛】
Metleucauge yaginumai（著名なクモ学者八木沼博士）

アシナガグモ科



種の特徴

体長雌８～11mm、雄５～6.5mmで、普通種のメガネドヨウグモに大きさも腹部の斑紋も、背甲にある眼鏡状の斑紋も酷似しています。しかし、キタドヨウグモには眼鏡の中央にある眼鏡状の斑紋がありません。
成熟期は６～８月初旬です。
渓流の岩の間、低木の樹間に斜めに丸い網を張ります。

生息環境

山地、特に高地の渓流で、川べりに低木が張り出しているところに見られることが多いです。

国内や県内の分布

北海道では普通に産し、本州では800～1,000m以上の山地で、県内では大町市、八ヶ岳、千曲川源流に記録があります。

市内の状況と絶滅危惧要因

八幡大池に産します。大池に流れこむ細い川で、岸はササや草で覆われていて生息地が狭められています。
個体数はきわめて少なく、市内での生息に適した環境が限られていることから、絶滅の危険性が高い種です。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

シロブチサラグモ

【白縁皿蜘蛛】
Prolinyphia radiata（放射状に輝く）

サラグモ科
サラグモ亜科

種の特徴

体長は、雌４～６mm、雄4.5～７mmで黒褐色の背甲の側面に白い縁があることが、他の類似したサラグモ類と大きく異なります。
成熟期は５～７月です。
深いおわんを伏せた形の皿網を張り、クモはその頂部に仰向けに占座しています。

生息環境

やや湿り気のある山地の路傍や草むらに生息します。

国内や県内の分布

北海道、本州、四国、九州に分布します。
県東北部の里山では本種が少なくなっています。

市内の状況と絶滅危惧要因

八幡大池に生息しています。樹木の下など、木陰を伴う草むらが保全されている場所で生息しています。
草刈機による過度な草刈りは生息環境が乱されるおそれがありますが、適度な草刈りは環境整備として必要です。

準絶滅危惧　長野県：指定なし　環境省：指定なし

シナノヤマヤチグモ（仮名）

【信濃山谷地蜘蛛】
Tegecoelotes sp.

ヤチグモ科

種の特徴

体長は雌雄とも９～11mm、体全体が淡黄褐色で腹背に薄い矢筈状の斑紋があります。雄の触肢の腿節と膝節が非常に長いことが大きな特徴です。
成熟期は10～11月です。潅木やササの枝の間に薄いシート網を張ります。子グモは空中遊泳（バルーニング）しないと考えられます。

生息環境

林縁のヤマツツジなどの潅木、ササ類の群落に生息します。

国内や県内の分布

現在のところ長野県のみで確認されています。安曇野の北アルプス山麓、高山村奥山田、奥裾花自然園（未発表）。

市内の状況と絶滅危惧要因

八幡大池から三峯山中腹の林道沿いで確認しました。この場所はローム層からなる林地を造成して植林が行なわれた場所で、林道の周囲は低木、高木の林縁部になっています。分布地の個体数は多いですが、植林地の造成にともなう大型重機での地形の変更により植生が攪乱されると本種の生息環境が破壊されるおそれがあります。

特記事項

上記の生息地と当地の標本をもとに、新種記載発表される予定です（平成23年２月現在）。

準絶滅危惧

長野県：指定なし　環境省：指定なし

タカノハエトリ

【高野蝿取蜘蛛】
Heliophanus lineiventris（綿状の大腹）

ハエトリグモ科

種の特徴

体長雌５～７mm、雄4.5～６mm、背甲も腹部背面も光沢のある黒色で、歩脚も腿節は黒色です。腹部の前縁から側面は白色の帯状紋に縁取られています。
成熟期は４～６月で、わずかに草の生えた丸い礫と砂のある川原を好み、草の根元と石の間に産卵し、孵化した子グモが袋から出るまで守ります。

生息環境

まばらに草が生えた大きな礫と砂の混じった川原に生息します。

国内や県内の分布

本州の平地に広く分布します。県内では安曇野市の犀川の川原、上田市の千曲川の川原に記録があります。

市内の状況と絶滅危惧要因

戸倉の千曲川原で確認しました。小面積ながら、生息条件は揃っていますが、草地化が進んでいます。市内では稀産で、川原の陸地化、アレチウリなどの繁茂により生息適地が減少していることが危惧されます。

特記事項

和名はクモ学者高野伸二にちなんでいます。

情報不足

長野県：指定なし　環境省：指定なし

ナルトミダニグモ

【成富壁蝨蜘蛛】
Ischnothyreus narutomii（東大教授成富氏）

タマゴグモ科

種の特徴

体長は雌雄ともに1.3～1.8mmで、腹部背面の前部は硬化した盾状の板で覆われています。
成熟期は５～７月です。

生息環境

湿潤な落ち葉、石や倒木の下などに生息します。

国内や県内の分布

やや暖地性の種ですが、秋田県からも記録があります。
県内での生息確認は千曲市が初めてです。

市内の状況

倉科の三滝で確認されました。
生息環境として非常に適合した場所です。個体数は非常に稀、市内では湿度の高い落葉層のある所は少なく、生息環境が少ないこと、また、失火による山火事、樹木の伐採による乾燥化が絶滅の要因です。

特記事項

微少種のため、気づきにくいが、人知れず絶滅しないよう、情報不足として掲げます。

地域個体群　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ミヤマナンキングモ

【深山南京蜘蛛】
Neserigone basarukini（人名）

サラグモ科
コサラグモ亜科

種の特徴

体長は雌雄とも2.3～3.5mmで背甲は黄褐色で頭部は濃色です。歩脚は淡黄褐色で腹部はやや灰色がかった黄褐色です。成熟期は６～７月です。ササの葉の上または裏面にシート網を張り、網の下面に占座しています。

生息環境

山地から亜高山地にかけて、おもにササ群落に生息します。

国内や県内の分布

北海道には普通に産します。本州で記録があるのは長野県のみです。

市内の状況と絶滅危惧要因

八幡大池周囲のササ藪に一様に生息していますが、所によって生息密度が非常に高い箇所があります。現在生息環境として安定しているように見えますが、ササを一斉に刈り取ると、地域個体群としての特性が失われてしまいます。

特記事項

国産種のほとんどの種が掲載された図鑑が出版されたことにより、国内各地から採集報告が出る可能性があります。

地域個体群　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ナガテオニグモ

【長手鬼蜘蛛】
Singa hamata（鉤形の）

コガネグモ科

種の特徴

体長は、雌５～７mm、雄４～５mmで腹部の背面は黒褐色、中央に白い筋が縦に走っています。側面も白いです。
成熟期は５～10月です。
垂直な円網を張り、その一端が付着しているイネ科植物の葉を巻いて中に潜み産卵も行ないます。

生息環境

チガヤのような草丈が短く、茎がしっかりしたイネ科の植物が生えた草原を好みます。

国内や県内の分布

北海道、本州では兵庫県以北に分布しています。県内の水田地帯の全域に分布の可能性があります。

市内の状況と絶滅危惧要因

大池キャンプ場一帯に多産しています。
姨捨の棚田にも生息していますが、大池は本種の生息環境に適合した管理がなされているため、生息密度が高いです。
低地では、水田やため池の土手が常に除草されているため、生息できる環境が失われつつあります。

留意種　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ハツリグモ

【葉吊蜘蛛】
Acusilas coccineus（深紅色の）

コガネグモ科

種の特徴

体長は雌８～10mm、雄５～６mmです。体全体がつやのある赤褐色です。成熟期は５～７月です。
垂直な円網を張り、中央に枯葉を巻いて吊るし、昼間は中に潜んでいます。

生息環境

あまり日の差し込まない低木林地に生息します。

国内や県内の分布

北海道を除く日本全土。県内では飯山から下伊那にかけて分布します。

市内の状況と留意要因

佐良志奈神社境内から八王子山散策道、倉科の三滝に生息します。神社及び関係者による適切な管理で、良好な生息環境が保たれています。
土手の過度な刈払いをすると生息環境が破壊されてしまいます。
佐良志奈神社に限り生息密度が高いです。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：絶滅危惧Ⅰ類　環境省：準絶滅危惧

オオコウラナメクジ　*Nipponarion carinatus*　オオコウラナメクジ科

種の特徴

大きい個体で体長35mm、体幅10mmくらいになります。多くのナメクジのなかまは、貝殻が退化してありませんが、本種は、背中に楯状の軟体があり、その部分が名前の甲羅となっています。甲羅の中には小さな貝殻が入っています。体が縮んでいるときは、甲羅の後ろの部分が鋭く尖った形になるのが特徴です。

生息環境

広葉樹の朽ち葉の中にいて、雨の日や夜間に出てくるので、人目に触れる機会は少ないです。

国内や県内の分布

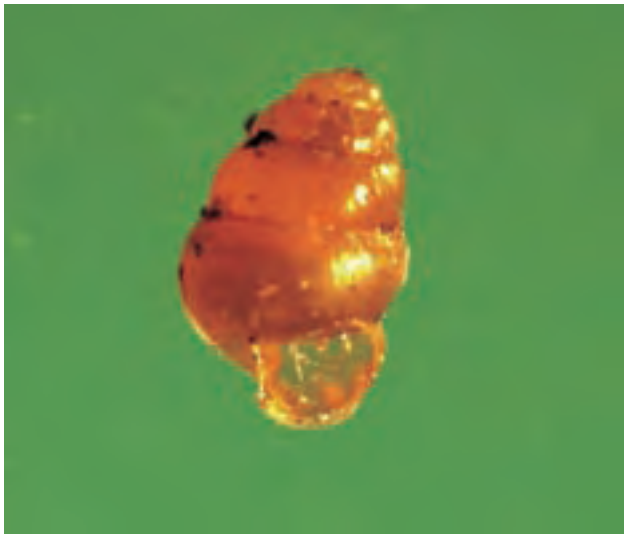
南は九州の熊本県から、北は新潟県・福島県で報告されています。長野県では大町市・飯田市・大滝村・八千穂村など５地点で確認されています。

市内の状況と絶滅危惧要因

県道上山田聖高原線沿いの道路下で幼体を２個体確認しました。２度にわたって広い範囲の落ち葉を掘り返して探しましたが、大人になったものは見つかりませんでした。生息個体数も少なく、狭い範囲に生息している種ですので、わずかな環境悪化により絶滅するおそれがあります。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：絶滅危惧Ⅱ類

ヤマトキバサナギガイ　*Vertigo japonica*　キバサナギガイ科



種の特徴

殻高1.7mm、殻径１mmくらいの非常に微小な巻貝です。小さいけれど、５層あります。貝殻は淡褐色で、細長く、殻頂部（貝殻のお尻の部分）は、あまり尖っていません。貝殻の口のなかに、４本の歯のような突起があるのが特徴で、和名では「キバ」という言い方で表されています。

生息環境

依存する植物等はなく、これまでに確認された環境は、広葉樹の朽ち葉中・クルミの朽ち葉の裏・スギとの混交林・コケ類の中などです。

国内や県内の分布

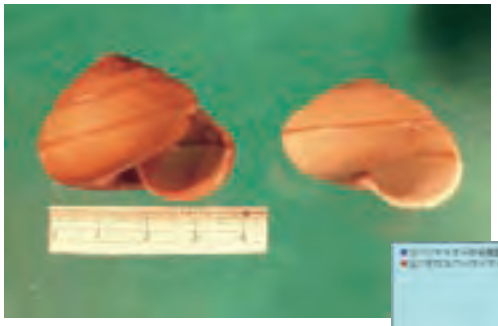
全国的にも九州から紀伊半島の太平洋側と北海道からの報告があるのみです。そうした中で長野市・松本市・望月町・喬木村での確認は特筆されます。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲市では、八幡のJAちくま育菌センター近くの山で２個体が確認されました。スギと広葉樹の混交林の朽ち葉の中からです。３回調査しましたが、他には見つかりませんでした。微小種で、わずかな環境悪化により絶滅するおそれがあります。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：指定なし　環境省：準絶滅危惧

コシタカコベソマイマイ　*Satsuma fusca*　ニッポンマイマイ科



左：コシタカコベソマイマイ
右：コベソマイマイ

種の特徴

殻高35mm、殻径39mm、７層の饅頭型をした巻貝です。類似種として、長野県にはコベソマイマイも生息しています。両種の相違点は名前に示されたコシタカ（腰高）すなわち螺塔が高いことで区別できます。また、臍穴が閉じているのも特徴でコベソ（小臍）の名前となっています。

生息環境

広葉樹・混交林の朽ち葉上でみかけますが、稀に杉林でも確認しています。

国内や県内の分布

近畿北部から北陸、中部地方に分布しています。長野県は全国的に見たとき、北・東限域になっています。県内では中・北信に分布していて、左図に示すように両種は分布域を異にしています。

市内の状況と絶滅危惧要因

力石地区の広葉樹林の朽ち葉の中から、死に殻を１個体確認しました。全国的に見たとき、分布の周縁に当たり、絶滅が危惧されます。

絶滅危惧Ⅰ類　長野県：準絶滅危惧　環境省：準絶滅危惧

スジキビ　*Parakaliella ruida*　ベッコウマイマイ科

種の特徴

殻高２mm、殻径3.5mmくらいのソロバン玉状をしている巻貝で、貝殻は薄くもろいです。体層（一番外側の貝殻の部分）は鋭く角張っています。背中側の貝殻の表面には規則正しい成長脈が連続していて、その様子を和名で筋（スジ）と表しています。キビは穀物の黍くらいの大きさという意味です。軟体部は黒色をしています。

生息環境

これまでに、県内では23箇所で確認しています。ほとんど朽ち葉中ですが、広葉樹11箇所、針葉樹（全箇所スギ）７箇所、混交林４箇所で、林内が多いですが、樹種は決まっていません。

国内や県内の分布

中国・近畿・中部・関東・東北地方で確認されています。県内では、木曾、上・下伊那、南北安曇、下高井、佐久と広い範囲で確認されていますが、生息個体は極めて少ないです。

市内の状況と絶滅危惧要因

八幡地籍の混交林の朽ち葉中と、林道聖高原線沿いの広葉樹の朽ち葉の中から１個体ずつ確認しました。生息個体数も極めて少なく、わずかな環境変化で絶滅のおそれがあります。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：指定なし　環境省：指定なし

ミスジマイマイ　*Euhadra peliomphala*　オナジマイマイ科

種の特徴

殻高22mm、殻径44mmくらいの饅頭型の巻貝です。貝殻に黒っぽい線（色帯という）があるのが普通ですが、全く線のないものもあります。線は一番多いもので４本あり、４本あるものは１２３４というように表します。多くの標本を調べますと、０２３４と３本の線の個体が多いことからミ（３）スジマイマイと和名が付けられました。ほとんどのマイマイは、地べたで生活していますが、ミスジマイマイは、樹上で生活する種です。また、山地の個体は大きく、黒っぽいですが、平地は白っぽく、貝殻が薄いのも特徴です。

生息環境

南信では、クルミや各種広葉樹の幹に付いていることが多く、梅雨時には生垣や、石垣を這っているのを見かけます。

国内や県内の分布

関東地方に分布する種で、長野県は周縁に当たります。北信に少なく、南信に多い種ですが、佐久地方では確認していません。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲市では、八幡と生萱で確認しました。八幡は広葉樹林の落葉中から１個体の死に殻を確認しましたが、生萱はキャベツ畑で生貝を確認したとのことでした。その後、再度確認しようと調査しましたが、見つかりませんでした。非常に数も少なく、消毒など人為的な環境破壊により、絶滅が心配される種です。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：指定なし　環境省：準絶滅危惧

ケハダビロウドマイマイ　*Nipponochloritis fragilis*　ニッポンマイマイ科

種の特徴

殻高16mm、殻径20mmくらいの貝です。軟体は、黒色にちかく、生貝は汚れた茶褐色ですが、貝殻は黄褐色です。貝殻は薄くもろくて、半透明で規則正しく毛様の突起があるのが特徴で、名前の由来になっています。

生息環境

シイタケの原木の間や、朽木の下から見つかることが多いですが、スギの朽ち葉の間にも生息しています。

国内や県内の分布

西は鳥取・岡山県から新潟・福島県の間に分布しています。県内では中信地方での確認が多く、南信でも僅かに確認されていますが、東信・北信ではあまり見つかっていません。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲市では、新山地区新池の杉林で１個体確認しました。標高600mくらいの所ですが、長野県のこれまでの記録では、最も低い場所です。最も高い場所での記録は、常念岳の2750m地点のハイマツ帯で確認したものです。個体数そのものが少なく、個体どうしの出合いも限られており、僅かな環境変化にも影響されそうで、今後の生息が心配されます。

絶滅危惧Ⅱ類　長野県：絶滅危惧Ⅱ類　環境省：準絶滅危惧

カワナビロウドマイマイ　*Nipponochloritis kawanai*　ニッポンマイマイ科

種の特徴

殻高14mm、殻径20mm、５層の巻貝。前種と同様、貝殻に毛様突起があります。高級な織物の一つにベルベットとかビロウドと呼ばれる布があります。織物は毛羽立っていて手触りがよいですが、殻皮毛の様子から付けられた名前です。カワナは発見者の川名美佐男氏に献名されたものです。

生息環境

前種と同じような環境に生育しています。

国内や県内の分布

長野・群馬・栃木・福島の４県で確認されている種です。長野県では北信地方を中心に、東信・中信でも確認されていますが、木曽谷での確認はされていません。いずれの地でも死に殻や幼貝が多く生息個体数は極めて少ないです。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲市では、新山地区の杉林から死に殻が１個体だけ確認されました。他の地域で生息していることを願うばかりです。県内では440～1400mの間で確認されています。

準絶滅危惧　長野県：指定なし　環境省：指定なし

カワコザラ　*Paracymoriza vagalis*　カワコザラガイ科

種の特徴

殻長径４mm、殻短径2.5mmくらいの、長楕円形で笠形をした貝です。貝殻は薄く半透明で、不規則な生長脈があります。殻頂は中央部よりやや後方にあります。

生息環境

池に浮いた朽ちた植物の茎や葉に付着しています。水田では稲の茎などについていますが、長野県では名前の初めに付いたカワ（川）からはあまり見つかっていません。

国内や県内の分布

本州、四国、九州と全国に分布し、北海道でも１箇所で確認されています。長野県では14地点ほどで確認していますが、調査が不十分ではっきりしたことはいえません。

市内の状況と絶滅危惧要因

聖湖と千曲高原の小池で確認しました。どちらも、湖面に浮いた朽ちた植物に付着していました。生息個体数も少なく、湖沼の環境変化によっては今後の生息が危惧されます。

準絶滅危惧　　長野県：準絶滅危惧　環境省：準絶滅危惧

クニノギセル　*Mundiphaedusa kuninoae*　キセルガイ科

種の特徴

殻高19～23mm、殻径４mm、11層の紡錘形をした巻貝です。貝殻の色は淡褐色タイプと、淡緑色タイプがあります。貝殻の表面に絹糸状の脈が見られることから、キヌハダギセルとも言われましたが、クニノギセルと同名異種ということで、1994年に湊宏氏によって命名年の古いクニノギセルに統一されました。クニノは桑原クニノさんに献名されたものです。

生息環境

多くは広葉樹の朽ち葉中で確認していますが、稀にスギの朽ち葉中でも見かけることがあります。

国内や県内の分布

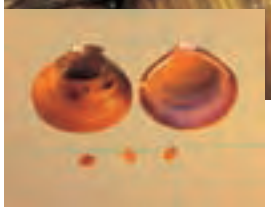
長野・富山・新潟・山梨・群馬・福島・山形県で確認されています。長野県では南北に分かれたように分布しています。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲市では、県道聖高原千曲線沿いの２地点で数個体を確認しました。当市にはヒカリギセルが多くの地で確認されますが、比較すると個体数は格段に少ないです。いずれの地も広葉樹の朽ち葉中でした。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：準絶滅危惧

マシジミ　*Corbicula leana*　シジミ科



種の特徴

殻長20～30mmくらいの二枚貝です。食卓に上るのは、ヤマトシジミやセタシジミと言われる種が大部分です。本種は幼貝は黄緑色で、成貝では貝殻になると、雲状紋といわれる染みのような模様が出るものが多いのが特徴です。また、左の写真の下側に示したように、カタツムリなどと違い小さな貝を生みます。

生息環境

河川や池の砂泥底・砂底・砂礫底に生息しています。泥の中ではあまり見かけません。

国内や県内の分布

本州・四国・九州と全国に分布していますが、東北地方や北海道からの報告は少ないようです。長野県では左図のような地点で確認していますが、調査は不十分ではっきりしたことは言えません。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲市では戸倉の磯部・福井、上山田の六ケ郷用水で確認しています。類似種として、タイワンシジミを戸倉の柏王、屋代駅周辺で確認しました。本種は繁殖力が旺盛で、マシジミと見かけ上の交雑が行われ、結果として遺伝型はタイワンシジミになってしまうといわれます。その点で、河川環境の影響も懸念されますが、外来種による絶滅が心配です。

準絶滅危惧　　長野県：準絶滅危惧　環境省：準絶滅危惧

マルタニシ　*Cipangopaludina chinensis laeta*　タニシ科

種の特徴

殻径30mm、殻長40mmくらいの巻貝です。貝殻では雌雄の区別はできません。左の写真は雌です。２本の触覚が真直ぐに伸びています。雄は右側が僅かに曲がっていて、触角がペニスの役目をしています。貝殻はオオタニシに比べ、丸みを帯びていて、大きくなると、貝殻に打痕と言われる、金槌で打ったような窪みが現れる個体もあります。かつては、味噌汁の具などにし、山国信州では貴重なタンパク源でした。

生息環境

水田・池・側溝、稀に河川に生息することがあります。

国内や県内の分布

北海道から沖縄まで広く分布しています。長野県でも南から北まで分布しますが、北に多いようです。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲高原の大池・中池など13地点程で確認しました。多くの池に生息していて、絶滅の心配がないように思いますが、中池では、水田に水を引く時期で干上がり、死に殻もごろごろむき出していました。まだ、未調査の所が多く、はっきりしたことは言えませんが、県内で確認したマルタニシを赤点で、青点でオオタニシ（次種）の分布の様子を示しました。

準絶滅危惧　　長野県：指定なし　環境省：準絶滅危惧

オオタニシ　*Cipangopaludina japonica*　タニシ科

種の特徴

殻径40mm、殻長60mmくらいになりますが、下伊那郡では殻長73mmほど、北海道の記録では80mmに達する個体もあるそうです。雌雄の区別はマルタニシと同様触覚で行います。体層に弱い角があることで区別できます。

生息環境

マルタニシと同様、水田・池・側溝などに生育しています。

国内や県内の分布

九州から北海道まで広く分布しています。県内では、前種のところに分布図を示しましたが、北信での確認はあまり多くありませんでした。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲市では、戸倉の池で一箇所確認したのみでした。どうした経緯で生息するようになったのか調べてありませんが、大切にしたい種です。

準絶滅危惧　　長野県：準絶滅危惧　環境省：準絶滅危惧

モノアラガイ

Radix auricularia japonica

モノアラガイ科

種の特徴

殻高20mm前後の巻貝です。写真では、斑模様があるように見えますが、貝殻は半透明でもろく、軟体の部分が透けて見えるためです。モノアラガイの仲間はタニシなどと違い、触覚が三角になっています。また、目が触覚の基にあることから、分類の上では基眼目に入れられています。一つ一つの卵を産むのでなく、ゼラチン質の袋状の中に20個近くの卵を産み付けます。

生息環境

河川・池・側溝などに多く、水田からの確認もあります。水に浮いた枯れた植物などに付着しています。

国内や県内の分布

九州から北海道まで広く分布しています。長野県でも広く分布しているようですが、全国的に1980年頃から池や水路から数が減じてきているといわれます。

市内の状況と絶滅危惧要因

千曲市では、八幡の池と千曲川河川敷の２箇所で確認しました。いずれの地も数個体で、一つの卵袋に20個も産めば、数が増えそうですが、そうした兆しはありませんでした。